

福井の幕末明治をひも解く

福井の幕末明治

歴史秘話



福井の幕末明治の年表

江戸

- 1838 天保9 10月 松平慶永(春嶽) 11歳で第十六代福井藩主となる
- 1844 弘化元 4月 大野藩の学校「明倫館」開設
- 1848 嘉永元 6月 福井藩・橋本左内、「啓発録」を著す
- 1852 嘉永5 3月 熊本藩・横井小楠、松平慶永(春嶽)から藩校創設について意見を求められ「学校問答書」を提出
- 1853 嘉永6 6月 黒船来航にともない、福井藩は品川御殿山、鯖江藩は江戸の警備にあたる
- 1855 安政2 5月 大野藩・内山良休が藩直営の物産販売所大野屋をチェーン展開し、財政再建をめざす
6月 福井藩の学校「明道館」開設
- 1857 安政4 8月 橋本左内、松平慶永(春嶽)の侍読兼御内用掛となり、慶永(春嶽)の手足・頭脳となって動くようになる
小浜藩・梅田雲浜が尊王攘夷の主導者として奔走
- 1858 安政5 橋本左内と村田氏寿が將軍継嗣問題で西郷隆盛と活動
横井小楠が、松平慶永(春嶽)の政治顧問に就任
鯖江藩・間部詮勝が老中、小浜藩・酒井忠義が京都所司代となる
7月 松平慶永(春嶽)が大老・井伊直弼と意見が合わなかったため、謹慎を命じられる
元小浜藩・梅田雲浜が逮捕される
- 1859 安政6 4月 福井藩・佐々木長淳が洋式帆船を完成・進水させる
9月 梅田雲浜、小倉藩邸内の牢で死去
10月 橋本左内が26歳で処刑される
- 1860 万延元 9月 松平春嶽の謹慎が解かれる
- 1862 文久2 7月 松平春嶽、幕府の政事総裁職に就く
- 1863 文久3 5月 土佐藩・坂本龍馬が幕臣・勝海舟の使いとして福井を訪れ、横井小楠・三岡八郎(由利公正)を訪問
- 1864 元治元 5月 禁門の変(蛤御門の変)で、福井藩の軍勢も御所を守って長州藩と戦う
- 1866 慶応2 10月 福井藩・日下部太郎がアメリカへの留学を幕府から認められる
- 1867 慶応3 11月 坂本龍馬が再び福井を訪れ、三岡八郎(由利公正)と新政府について話し合う
中根雪江が坂本龍馬から三岡八郎(由利公正)の新政府への出仕に関する手紙を受け取る
12月 三岡八郎(由利公正)、中根雪江、新政府に参画
- 1868 慶応4 1月 由利公正、五箇条の御誓文の原案「議事之体大意」を作成する



松平慶永(春嶽)



橋本左内



内山良休



梅田雲浜



三岡八郎(由利公正)

明治

- 1869 明治2 5月 由利公正、我が国初の全国通用紙幣「太政官札」を越前和紙を使い発行、明治2年7月までに4800万両が発行される
- 1871 明治4 1月 グリフィスが、明新館(明道館の後身)の教師として福井に来る
7月 由利公正が東京府知事に、村田氏寿が福井県知事に就任する
- 1874 明治7 1月 由利公正・板垣退助らが、民撰議院設立建白書を提出する
村田氏寿が警視総監として行政警察制度の基礎を確立
- 1877 明治10 1月 由利公正が提案した「銀座煉瓦街」が完成
- 1878 明治11 5月 オランダ人技師のエッセルとデレーケが参画し、三国港の築港工事を開始
- 1881 明治14 2月 足羽郡福井を県庁所在地として、現在の福井県が設置される
- 1884 明治17 4月 坂井郡津村温泉上場(芦原温泉)開業式が行われる
- 1885 明治18 6月 渡辺洪基が東京府知事に就任する



渡辺洪基

福井の幕末明治

歴史秘話

INDEX

1	島津齊彬・久光兄弟に対する松平春嶽の人物評	P.03
2	幕末の四賢侯松平春嶽と山内容堂の関係	P.04
3	幕末福井藩の明君、松平春嶽の先進性～自転車とりんご～	P.05
4	明治政府で松平春嶽を孤立させた政敵、大久保利通	P.06
5	西郷隆盛の心の友、橋本左内	P.07
6	鎖国の時代に商社設立 福井の産品を海外輸出した由利公正	P.08
7	もう一人の「経世済民の男」～由利公正～	P.09
8	あの「五代様」は由利に異を唱えた人物だった	P.10
9	由利家のルーツと復姓に秘められた公正のリベンジ	P.11
10	世界都市を目指した東京府知事、由利公正～ニューヨーク等に肩を並べる街に～	P.12
11	日本初のアスファルト舗装に挑んだ由利公正	P.13
12	由利公正をめぐる早慶戦～早稲田、慶応の創始者と由利との関わり～	P.14
13	財政政策は庶民の豊かな生活のため～ぶれない心は晩年まで～	P.15
14	西郷隆盛が信じ頼りにした男、由利公正	P.16
15	新発見「龍馬の手紙」に登場する福井藩三人の関係	P.17
16	「五箇条の御誓文」につながる三人の先人～横井小楠、坂本龍馬、由利公正～	P.18
17	蟄居中も天下国家を論じた横井小楠～土道忘却事件とその後の生き方～	P.19
18	福井の先人を支えた女性たち～逸話の中に見えてくる先人の原点～	P.20
19	松平春嶽を教え導いた鈴木主税	P.21
20	マルチな才能を発揮した佐々木長淳	P.22
21	西郷隆盛と心のうちを打ち明けあった村田氏寿	P.23
22	貧しくとも心豊かに生きた歌人、橘曙覧	P.24
23	弟同士の交友 橋本綱常と西郷従道～兄と同じく偉大な功績を残した二人～	P.25
24	命がけで天然痘に立ち向かった笠原白翁	P.26
25	“裏の雪爪”と称された春嶽の禅師、鴻雪爪	P.27
26	春嶽が寵愛した三国湊の彫刻家、島雪斎	P.28
27	左内や由利を育てた実践の儒学者、吉田東篁	P.29
28	幕政の手綱を握った老中、間部詮勝	P.30
29	激動の京都で活躍した酒井忠義	P.31
30	幕末の志士のさきがけ梅田雲浜	P.32
31	グリフィスが見た明治維新とその中心人物、由利公正	P.33
32	アメリカで散った若い命が日米の国際交流の懸け橋に	P.34
33	幕末の悲劇 水戸天狗党事件（前編）～小藩、大野藩の窮余の一策～	P.35
34	幕末の悲劇 水戸天狗党事件（後編）～非情な処分の裏に慶喜の悲痛な思い有り～	P.36
35	大野藩の危機を救った土井利忠	P.37
36	新領地を求めた大野藩の挑戦～蝦夷地開拓と大野丸～	P.38
37	勝山の近代産業の父、林毛川	P.39
38	河野浦が生んだ偉才、9代目右近権左衛門	P.40
39	生涯敵対し合う犬猿の仲、関義臣と由利公正	P.41
40	知識と技術と実践で若狭の農を支えた伊藤正作	P.42
41	上野丹山、知られざる偉業-坂東本『教行信証』の臨写-	P.43
42	幕末に曹洞宗の宗権確立に挺身した臥雲禅師	P.44
43	多くの優れた弟子を育てた儀山善来	P.45
44	三国港を救ったオランダ人技師、エッセル	P.46
45	明治国家のプランナー、渡辺洪基～外交、政治、教育で手腕を発揮～	P.47
46	自由民権運動に影響を与えた吉田健三	P.48
47	「食医」と呼ばれた食育の祖、石塚左玄	P.49
48	近代法学の草創期を駆け抜けた矢代操	P.50
49	世界のエンターテイナー、松旭斎天一	P.51
50	日本鉱物学の父にして古書籍蒐集に尽力した和田維四郎	P.52
51	一途な思いで敦賀発展に取り組んだ大和田荘七	P.53
52	夏目漱石らにも影響を与えた釈宗演	P.54
53	横浜生まれの福井藩士、岡倉天心	P.55
54	佐久間勉艇長 妻の死を悲しむもう一冊の手帳	P.56
55	関西の奥座敷、芦原温泉の開湯起源	P.57

島津斉彬・久光兄弟

に対する

松平春嶽の人物評



松平春嶽は、明治維新後、著作活動に励み、その著書の一つである随筆『逸事史補』には、幕末から明治に活躍した人々の人物評が記されています。様々な人物が登場しますが、その中で春嶽が最も尊敬する人物として記されているのが、盟友、島津斉彬です。

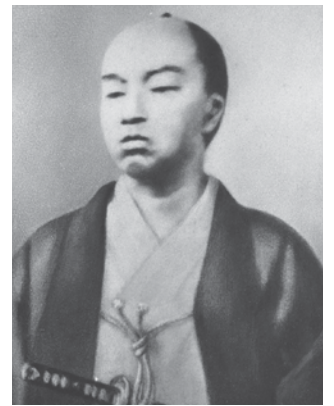
斉彬は、老中阿部正弘などと結び幕政改革・公武合体を図り、將軍継嗣問題では春嶽とともに一橋慶喜擁立に奔走した幕末の名君の一人です。『逸事史補』では、「明治維新の成功はすべて斉彬の功である。」「肝が大きく、才智より道徳を重んじた。」「穏やかで慎重深く、学問に通じていた。」「尊皇家でありかつ佐幕



島津斉彬肖像 (尚古集成館蔵)

家」「西郷隆盛、大久保利通は、斉彬が丹精して育てた人物」「節約家だが、必要に応じ、大金を惜しげなく使った。吝嗇家(ケチ)ではない。」「などと評し、その見識や人材登用に對する尊敬の念と信頼の厚さが感じられます。

一方、斉彬の死後、若き藩主の後盾として藩政をリードした、弟の



島津久光肖像 (国立国会図書館蔵)

島津久光については、「悪口を言う人も多いが、斉彬と同様に才智より道徳を重んじた。」「尊皇の志は斉彬を超えている。」としながら、それ以上の評価や逸話を記載することは行いませんでした。「かえって悪くとられるといけないのでわざと記さない。」と理由を述べていますが、斉彬と異なり、心から尊敬できる人物とは描かれていません。

そのことを示す逸話が『逸事史補』に残っています。久光の密書に關する内容です。当時、その密書は、幕府隠密によって探し出され、將軍徳川家茂、慶喜、老中、春嶽など限られた人物のみ目にしたものでした。久光の密書には、「もはや徳川家だけではこれまでの治政を保つことが困難」「公家政治では混乱するから、五大老(徳川慶喜、山内容堂、松平容保、島津久光、毛利敬親)を立てるしかない。」「五大老の中で人望のある者が將軍になることもあるだろう。」と書かれていま

関連史料・ゆかりの地

養浩館庭園



養浩館は、別名、御泉水屋敷といわれ、江戸時代に福井藩主越前松平家の別邸だったところ。松平春嶽もしばしば訪ねたこの屋敷。その庭園は、回遊式林泉庭園をそなえ、江戸時代中期を代表する名園の一つとして知られています。

【住所】福井市宝永3丁目11-36 (JR 福井駅より徒歩15分)

した。春嶽は、「島津の存念は終始変わらず」として、常に国の実権を担おうとしていた久光の野心を見抜いていたといわれています。斉彬、久光、二人に仕えた人物の一人が西郷隆盛です。斉彬から厚い薫陶を受けていた一方で、久光については、その面前で「ジゴロ(田舎者)」と評するなど相当の確執がありました。春嶽と西郷の久光評、相通じるところはあるのでしょうか。

幕末の四賢侯

まつだいらしゅんがく
松平春嶽と

山内容堂の関係

やまうちようどう

将軍・徳川慶喜に大政奉還を建
白したことで知られる山内容

堂は、文政10（1827）年に、土佐藩主山内家の分家の長男として生まれました。第13、14代藩主が相次ぎ急死したことから、嘉永元（1848）年に第15代藩主となります。容堂が心を許し信頼した人物、それが松平春嶽でした。春嶽と容堂は、お互いに切磋琢磨し、何でも言い合える仲で、春嶽は、容堂の率直さを、容堂は、春嶽の誠実さを認め、信頼し合っていたといえます。

安政4（1857）年10月、二人は福井藩江戸上屋敷で開催された大講学会において初めて出会います。後日、第二回の会合が開かれ、容堂



山内容堂肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

について福井藩士、橋本左内はこう記しています。議論は鋭く、いずれの人も圧倒された様子。公は、計らずも自分をよく理解してくる友を得たと大いに喜ばれた。春嶽は、これ以後、容堂を同志として信頼し、將軍継嗣問題で慶喜擁立に奔走していきました。

文久2（1862）年7月、春嶽は政事総裁職に就任します。容堂

は、幕政の中核に進出した春嶽に対して、容易ではない、大がかりな仕事には、ゆつたりと構えなければなりません。常に心には「閑」の文字を持ち続けることが大切と進言。春嶽の性格をよく知る容堂は、重責を担う春嶽に対して余裕の心構えを持つ大切さを説いたのです。春嶽の性格は、謹直・誠実・几帳面で、一方、容堂は情熱のまま率直に行動する性格でしたが、これがかえって調和し、終世変わらぬ盟友となったようです。

慶応3（1867）年10月に大政奉還、12月に王政復古の大号令が発せられた後に開催された「小御所会議」において二人が支え合うエピソードが残っています。徳川家の処分が問題となり、慶喜の辞官・納地を求める岩倉具視らと春嶽、容堂らが対立しました。容堂は、今まで功績のある慶喜を出席させないことを非難して「3、4の公家が幼い天皇をもちたてて、権力を盗もうとしているだけだ」といきり立って大声で叫びました。これに対して岩倉具視は「無礼千万ですぞ」と一喝。春嶽は「しっかり公議をつくすためにも容堂殿の意見を取り入れて慶喜をこの席に召されたい」と容堂に助け船を出したといわれています。

容堂が残した言葉、一橋の英明、春嶽の誠実、それに我が果断を加わえて、天下の事を決すべし。これはまさに、春嶽を信頼し、国政に関わった容堂の道標となっていたのかもしれません。

関連史料・ゆかりの地

まつだいらしゅんがく
松平春嶽と
やまうちようどう
山内容堂が出会った
福井藩江戸上屋敷



松平春嶽と山内容堂が出会った福井藩江戸上屋敷は、現在の東京都千代田区大手町にありました。現在は周辺に案内板や銅像などがあり当時の面影をしのばせています。また、江戸東京博物館には、江戸時代の初期の上屋敷の模型が展示されています。模型を見れば、当時福井藩がいかに勢威を誇っていたかがうかがい知れます。

※画像は福井県が製作した再現CG

幕末福井藩の明君、 松平春嶽の先進性

「自転車とりんご」



松平春嶽肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕末福井藩の明君、松平春嶽は「日本初」のエピソードが二つあります。

一つは、乗り物に関するものです。福井藩資料や越前松平家・福井藩校に伝来した書籍など、一万点を超える資料群からなる「松平文庫（福井県立図書館保管）」の「御用日記」をひも解くと、文久2（1862）年2月6日に、「自転車」に関する記述が出てきます。

「佐々木権六がビラスビイデ独行车の組立てを行い、側近の中根雪江も立ち会う中、馬場で試乗した」。



佐々木権六（長淳）肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

春嶽が「ビラスビイデ独行车」という自転車に乗ったとの記載で海外から伝来した自転車に日本で初めて試乗した記録といわれています。春嶽は相当気に入る、その後もたびたび試乗し、夫人勇姫がその様子を見守っていた記録も残っています。

※「ビラスビイデ」は、フランス語で速い乗り物を意味する「ペロシビード」がなまった言葉とされています。

自転車（実際は三輪自転車）で横浜で荷揚げされたといわれる）を組み立てたのは福井藩士の佐々木権六（長淳）で、権六は、自転車以外にも洋式の鉄砲や帆船などの建造に携わり、モノづくりの分野で活躍しました。由利公正とともに武器・弾薬製造の責任者となり、分業による効率化により製造費を削減したほか、新政府で製糸・紡績業の発展に尽力したことで知られる人物です。

もう一つは、りんごの栽培に関するものです。春嶽が、幕府の政事総裁職をしていた文久2（1862）年、アメリカからリンゴの苗木を取り寄せ、江戸巢鴨の福井藩下屋敷に植えたという説があります。この経緯を明らかにする史料は現在のところ見つかっていませんが、当時を知る農務官僚（博物学者）の田中芳男氏が講演会（大正2（1913）年）で次のように回想しています。『巢鴨下屋敷には180センチメートルほどに育った西洋りんごが20〜30種あった』。越前公はそういうことは分かった方であったから、外国より取り寄せられたに違いないと。この証言から、巢鴨下屋敷の栽培が西洋りんごの渡来を確認できる最も早い事例と考えられています。

現在の「ふじ」や「つがる」など国産の品種の先祖は、明治4（1871）年、北海道開拓使次官の黒田清隆がアメリカから持ち帰った苗木（「紅玉」や「国光」など）で、春嶽が取り寄せた苗木ではありませんが、日本における西洋りんごの栽培史に春嶽の名はしっかりと刻まれているのです。

「幕末の四賢侯」と呼ばれ、「明治」の元号を提案したともいわれる春嶽。先進的な考え方で新しいものを取り込み、挑戦する生き方は、二つの「日本初」にもうかがい知ることがができます。

関連史料・ゆかりの地

福井神社



幕末四賢侯の一人、福井藩主、松平春嶽を祀る福井神社。戦災後、福井大学工学部の設計により再建され、一般の神社とは異なる特徴的な外観を持っています。拝殿の左手には、椅子に腰掛けた春嶽の像が鎮座しています。

【住所】福井市大手3-16-1（JR福井駅より徒歩9分）

参考資料等

『御側向頭取御用日記』（松平文庫（福井県立図書館保管））

柳沢美美子「福井藩巢鴨下屋敷のリンゴをめぐる」『福井県文書館研究紀要』第7号

明治政府で松平春嶽を

孤立させた政敵、 大久保利通



大久保利通肖像（国立国会図書館蔵）

NHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公、西郷隆盛の親友で、後に、敵対した維新のもう一人の元勳、大久保利通。彼と幕末の福井藩主、松平春嶽は、新政府で深い関わりを持っていました。

春嶽は明治3（1870）年から明治12（1879）年の約10年間に記した回顧録、『逸事史補』で、大久保について「大久保参議一蔵は、……古今未曾有の大英雄と申さねばならない。徳川の処分、封土（領地）の奉還、廢藩置県、……日本全国の人心を鎮定してその方向を定めた。

すべて大久保一人が全国を維持することによるものである。維新の功績は大久保をもって第一とする。」とし、最大級の賛辞を送っています。その大久保と春嶽は明治維新後、新政府においてともに重責を担います。しかしながら『逸事史補』で示された賛辞とは異なり、実際、春嶽は新政府内で大久保に絶えず苦汁をなめさせられていました。福井藩は、明治新政府において、議定に春嶽、また参与に由利公正、中根雪江ら5人が任命されるなど、新政府内で重要な役割を担うとされていきました。明治2（1869）年

3月には、全国諸藩の意向を図る議事機構として「公議所」が設けられ、各藩の代表により重要議案が審議されました。

「公議所」は、春嶽が目指した公議政体路線を具体化したものでしたが、大久保らが「無用の論多く、未だ今日の御国体には適し申まじく候」として強硬に反対した結果、同年6月にその機能を大幅に縮小されることとなります。藩閥専制政治を目指した大久保らは、公議政体派の排除を図ったといわれています。当時、政府内の要人で、藩主出身は春嶽ただ一人で、横井小楠の暗殺や由利の帰福等、福井藩出身者の離脱が相次ぎ、春嶽は政府内で孤立していきます。この動きの裏には、大久保らによる意図的な福井藩出身者排除の画策があつたとされています。



松平春嶽像（福井市立郷土歴史博物館）

春嶽は、その生涯で最も尊敬した人物を薩摩藩主、島津斉彬とし、斉彬こそが明治維新の原点であると評しています。その斉彬が育てた人物として、春嶽は『逸事史補』において、大久保を高く評価しています。しかし、実際の心の内はどうだったのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地

福井市立郷土歴史博物館



古代から現代まで福井の歴史を紹介する常設展示室、越前松平家伝来の品々を展示する松平家史料展示室等があります。また、福井城舎人門遺構、名勝養浩館庭園とともに、「福井 歴史の庭 散策ゾーン」として福井の歴史と文化を発信しています。

【住所】 福井市宝永3丁目12-1
(JR 福井駅より徒歩15分)

西郷隆盛の心の友、 橋本左内

橋本左内肖像
(福井市立郷土
歴史博物館蔵)



平 成30年のNHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公西郷隆盛は、薩摩藩士で明治維新の三傑に数えられる人物です。この西郷と最も関係が深かった福井の先人が橋本左内です。

薩摩藩主島津斉彬とともに江戸へと出府し、薩摩藩の「御庭方役(情報収集係)」となった西郷隆盛(当時29歳)は、安政2(1855)年12月に、福井藩士、橋本左内(当時22歳)と、薩摩藩の江戸屋敷で初めて会います。左内は国事について意見を交わそうと西郷を訪ねました。

その際、こんな逸話が残っています。左内が部屋を訪ねた時、西郷は縁側にて若い者に相撲をとらせていました。西郷は、小柄で楚々たる左内を一目見たものの、相撲が終わるまで待たせたそうです。左内は対座した際、「私は、あなたと国の大事について意見を交わしに来たのに、放っておくとは何事か。」ときっぱりと言ひ放ちました。続いて、「攘夷ではなく開国して国の力を強くすることが必要だ。」と、広い知識と深い洞察を示しながら語りました。西郷は左内の見識に驚き、これからも指導願いたいと、心から頭を下げ

たといいます。

翌日、西郷は正装し福井藩邸を訪ね、前日の無礼を詫びます。後日、西郷は「私は先輩では水戸の藤田東湖氏、同じくらしい年齢では橋本左内氏が立派だと思ふ。この二人の学問や人の大きさは私の到底及ばないほどだ。」と述べています。

その後、安政5(1858)年から、二人は將軍継嗣問題に奔走します。当時、將軍家定の後継者を巡り、一橋派と南紀派に分かれた政争が生じており、薩摩藩と福井藩とともに一橋慶喜擁立を目指していました。西郷が左内に宛てた直筆の書状(福井市立郷土歴史博物館保管)では、將軍の正室となった斉彬の養女篤姫を動かして問題を解決しようとする内容が記載されています。大奥からの情報は、篤姫→生嶋(篤姫付老女)→江戸薩摩藩邸、さらに、西郷を通じて左内から松平春嶽へ伝わったと言います。



西郷隆盛肖像 (国立国会図書館蔵)

西郷隆盛は、明治10(1877)

年9月、西南戦争で自刃しますが、カバンの中に左内からの手紙が入っていました。それは、安政4(1857)年12月14日付けの手紙で、一橋慶喜に関する報告書でした。20年前の亡友の手紙を死ぬまで肌身離さず持っていた西郷。左内は、西郷の最も敬愛する友人となっていたのです。二人の心の結びつきをうかがい知ることができるエピソードです。

関連史料・ゆかりの地

左内公園



安政の大獄により26歳の若さで命を落とした橋本左内。その遺徳を顕彰するため設けられた左内公園には、橋本左内とその両親の墓があります。敷地内にある左内の銅像は市民からの寄付により、昭和38(1963)年に建立されたものです。

【住所】福井市左内町7-7 (JR 福井駅よりコミュニティバスすまいる照手・足羽方面線「愛宕坂」下車徒歩2分)

鎖国の時代に商社設立 福井の産品を 海外輸出した由利公正

福 井県のあわら市と坂井市にまたがり広がっている台地、北部丘陵地。ここで、市民が中心となり、現在「あわら万博茶」の復活に取り組んでいます。

江戸時代に生産が始まったという福井のお茶。その歴史をひも解くと、一人の人物が浮かび上がってきます。それは、幕末明治に活躍した福井藩士、由利公正（当時 三岡石五郎）です。一体どのように関わっていたのでしょうか。

幕末、福井藩は他藩の例に漏れず財政が困窮していました。由利は、安政5（1858）年、藩財政の立て直しのためには外国との通商しかないと考え、熊本藩士、横井小楠

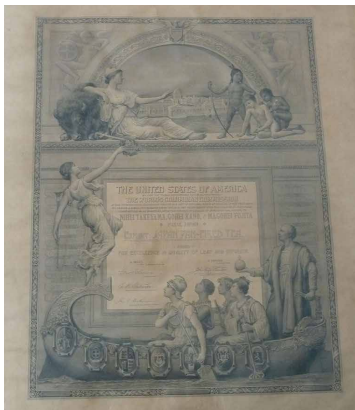
の帰国に同行して、下関で物産が集散する状況や商取引の実態を調べます。そして、翌年には長崎に行き、唐物商の小曾根乾堂の協力を得て、オランダ商館と国産の生糸・醤油などの輸出を約束することに成功します。また、波ノ平、下り松といった現在の長崎市小曾根町の港岸を埋築し越前蔵屋敷を設置したのです。

併せて、福井城下に物産総会所を設け、領内の物産集荷購入の仕組みを整えます。物産総会所とは現在の商社です。その元締めには、領内の豪農・豪商をあてました。販売ルートと輸出先の確保により、生糸や麻・醤油など福井の産品が海外に輸出されていきます。輸出は莫大な富をもたらし、一度に七万両が金蔵に入っ

たこともあり、その重みで床が抜けたともいわれています。

あわらのお茶も輸出品の一つで、輸出をきっかけに盛んに生産されるようになります。明治26（1893）年にはアメリカ・シカゴの万国博覧会で銅賞、さらに、フランス・パリの万国博覧会で金賞をとるほど海外で高い評価を得ることになります。

明治、大正に最盛期を迎えた茶園と製茶業は、昭和38（1963）年の豪雪により大損害を受けました。現在は、市内にわずかに残るお茶の



シカゴ万博で受賞した賞状（個人蔵）



シカゴ万博で受賞した銅メダル（個人蔵）

関連史料・ゆかりの地

北部丘陵地

木を使って茶の手摘み体験を実施していますが、今後、お茶を使ったスイーツなど食べるお茶としての商品開発にも取り組む予定です。



県内屈指の園芸産地。スイカ、大根、メロン等の野菜や、梨、柿等の果樹等が栽培されています。周辺には、景勝地である「東尋坊」や国定公園である海岸線、優れた泉質のあわら温泉等、年間600万人超が訪れる観光地を有しています。

【住所】あわら市二面（金津ICより車で約15分）

もう一人の

「経世済民の男」

由利公正



由利公正肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

『経世済民の男』は、NHKで平成27年8月～9月に放送された三部作のドラマです。明治から昭和にかけて日本を代表する経済人3名(首相や大蔵大臣等を歴任した高橋是清、阪急東宝グループを創設した小林一三、「電力王」や「電力の鬼」と呼ばれた松永安左エ門)が描かれました。

「経済」という言葉は、そもそも中国の古典の中にある「経世済民」という言葉が起源ですが、これは「世を經め、民を濟う」ことを意味しています。つまり、民を救うために

様々な公的対策を行わんとすることが「経済」なのです。

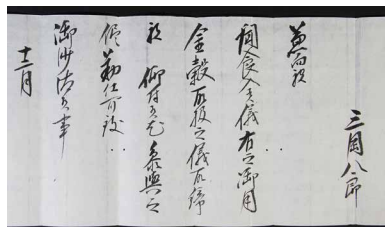
歴史家の中には、徳川幕府には、経済を政治と融合させる視点が欠けていた。貨幣経済への対応が進まず、財政が弱体化し、幕府終焉の要因の一つとなった。と指摘する人もいます。幕府は、米本位制度をとり、農民が収める税は米でした。農業重視の政策は米の生産増を実現しましたが、市中に回る米が増え、価格が下落。税収が目減りし、財政難となっていくます。また、朱子学が重んじられ、商売を卑しいとする考え方は、商業政策の実施を阻んでいま

した。

その一方で、その考え方に囚われなかった人物として、重商主義政策で幕政改革を行った幕府老中田沼意次などが挙げられますが、福井藩の由利公正も、経済を通し、政治を民のためのものにしよとした人物です。安政5(1858)年、由利は、民を富ませることこそ、武士の本分と考え、特産品の海外輸出に乗り出していきました。由利は、物産を興すには、民に楽しみをつけなければ動かない。と考え、生糸など特産品の生産から販売までを管理する物産総会所を設け、その責任者に藩内各地の農民や商人を当たらせ、利益の一部を分配したといえます。商人の一人は、武士が商売に手を出すことを痛烈に批判しましたが、由利は、商人達と一緒にゴロンと床に寝転がり、目線を合わせ、国の将来を憂いながら協力を求めたといえます。

明治新政府で由利公正は、現代の財務大臣のような立場で、初の全国通用紙幣「太政官札」の発行を推し進めるなど、国の経済の舵取りを任せられるようになります。由利がいなければ、戦費がショートし、新政府の東征が早期に終結せず、商人や農民が疲弊し、近代化の道も遠のいたかもしれません。経済の観点から日

本の近代化の礎を築いた男、由利公正。「経世済民の男」は由利公正の呼び名にふさわしいと言えるのではないのでしょうか。



金穀取扱之儀取締の沙汰書
(福井県立歴史博物館蔵)
新政府が三岡八郎(後の由利公正)を財政担当の職に任命したもの(慶応3(1867)年)

関連史料・ゆかりの地

越前和紙の里
紙の文化博物館



由利公正が発行した日本初の全国通用紙幣「太政官札」には越前和紙が使用されました。紙の文化博物館では、越前和紙の発祥の伝説や歴史について学ぶことができます。

【住所】越前市新在家町11-12
(JR 武生駅より福鉄バス南越線「和紙の里」下車徒歩5分)

参考資料等

由利正通編『子爵由利公正伝』

あの「五代様」は 由利に異を唱えた 人物だった



五代友厚肖像
(国立国会図書館蔵)

ドラマ「あさが来た」は大阪を舞台とし、その前半では、「五代様」こと五代友厚が人気を博しました。この五代、そしてドラマの舞台である大阪は、由利公正と深い関係にあります。

五代は、薩摩藩出身。安政4(1857)年に藩命で長崎に留学し、航海、砲術、測量を学びます。藩遣英使節団として英国に出発、欧州各地を巡歴した経験を持ち、この時の経験が買われ、明治新政府の参与職外国事務掛となりました。また、大阪に造幣局を誘致したほか、初代

大阪税関長となり、大阪税関の礎を築きます。その後は、官僚から実業家に転じ、大阪商工会議所の初代会頭となるなど、「東の渋沢(栄一)、西の五代」とまで称されました。

一方、由利は慶応3(1867)年12月、坂本龍馬の推挙によって新政府に徴士参与として出仕。翌年1月、殖産興業と戊辰戦争の戦費調達のため太政官札発行を建議します。上京するまでは、由利の活動の場所は京都や大阪でした。

当時の大阪は由利財政の反対派の拠点でした。その中心は五代のほか

江藤新平、大隈重信たち外国官所属の官僚達です。彼らは、太政官札が不換紙幣であること、乱発により信用が低下すること、贋金が横行することなどを懸念する外国公使からの批判を受け、由利の太政官札発行に真っ向から異を唱えました。

また、太政官札の発行布告直前の慶応4(1868)年5月9日、貨幣としての銀の取扱いが停止されます。当時、大阪周辺での商取引には銀が用いられていましたが、銀は形が一定でなく取り扱いが不便なため、実際には銀を用いず両替商が発行する手形が流通していました。両替商の中には銀の保管量以上の手形を発行するところも多く、突然の銀の取扱停止に手形の引換が殺到しました。支払不能になった両替商は倒産し、大阪経済は大混乱になったといえます。



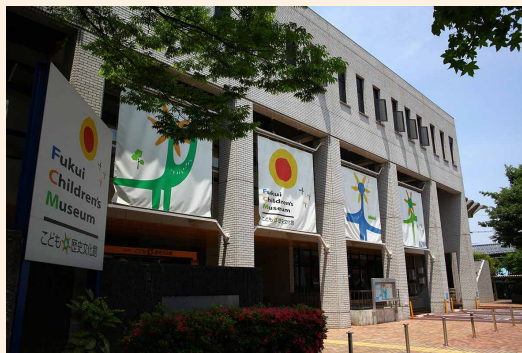
太政官札
(福井県立こども歴史文化館蔵)

ドラマ「あさが来た」では、主人公「あさ」の姉「はつ」が嫁いだ両替商「山王寺屋」が経営に行き詰まり、一家が夜逃げするシーンが描か

れていました。このことには、実は由利が関係していた。そのような視点でドラマをもう一度見返すのも面白いかもしれません。

関連史料・ゆかりの地

福井県立 こども歴史文化館



ふくいの歴史で活躍した人物について、映像や人形ジオラマ、イラスト等で楽しく紹介しています。由利公正の発案により発行された、わが国初の全国通用紙幣「太政官札」も所蔵しています。

【住所】福井市城東1-18-21
(JR 福井駅よりフレンドリーバス「こども歴史文化館」下車)

由利家のルーツと

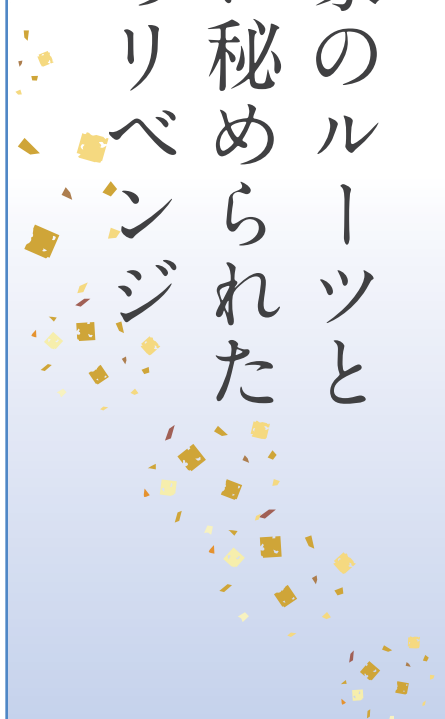
復姓に秘められた

公正のリベンジ

三 岡八郎（後の由利公正）は明治3（1870）年8月、旧

姓に復すとして姓を「三岡」から「由利」に変更します。三岡家は、平安時代から鎌倉時代にかけて出羽国（現在の秋田県）を本拠地とした豪族、由利維平（生年不詳〜1190）を始祖としています。鎌倉時代の歴史書「吾妻鑑」によると、維平は、鎮守府將軍藤原秀衡の重臣で、出羽国由利郡を所領としていたとのことです。

維平は、奥州合戦（文治5（1189）年）で、鎌倉軍に敗れ、生虜りになります。捕虜の身でありながら「運尽きて囚人と為るは、勇士の常」と堂々としたふるまいを貫き、高飛車な態度で尋問してきた



岡」を用いるようになります。その後、次郎左衛門は、信濃松代12万石を拝領した福井藩祖、結城秀康二男、松平忠昌に召し抱えられ、忠昌の越前転封により、福井城下に転住するのです。

公正は生前、「滝沢のむかしをきけばいまもなほ露のゆかりにぬるる袖かな」という詩を詠い、心のふるさとである滝沢の地を訪れることを念願していたといえます。しかし、その望みはかなえられませんでした。（明治40（1907）年頃、一度は福島県までたどり着きながら急病のため、引き返したということ）公正の孫、正通は、昭和14（1939）年5月に秋田方面を旅行し、由利郡にも足を伸ばします。祖父が望んでやまなかった祖先の土地を、公正の死去約30年後に訪れたのです。

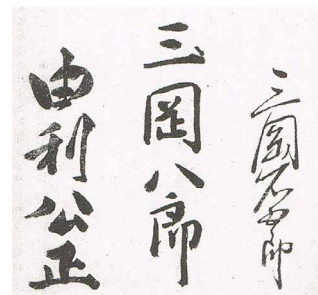
梶原景時の無礼をたしなめ、逆に礼を尽くした畠山重忠の尋問には応じたといえます。それを見ていた源頼朝も「勇敢の誉れ有るに依つて」維平の罪を許しました。

維平の子、維久は、和田合戦（建暦3（1213）年）に連座して大半の所領を没収されましたが、由利郡内の一部、滝沢地域の小領主となり、姓も滝澤氏と改めました。

滝澤氏は、戦国時代には最上氏の配下がありました。慶長19（1614）年に、最上義光が死去すると、先祖伝来の地を離れ、信濃に移住。19代滝澤勘兵衛は徳川家康六男、松平忠輝の重臣、花井主水の家臣となります。しかし、忠輝改易で勘兵衛は浪人となり、その子、次郎左衛門より母方の姓「三

伝記『由利公正伝』は、「今や自己の朝臣に列したるを以て家名再興の機到れりを信認したるなり」と改姓時の公正の心境を伝えていきます。公正は明治元（1868）年4月、「従四位下」に叙せられます。一大名の家臣として「従四位下」は破格の高位でした。この機こそ、家名を復する時と、公正は決意を固めます。文久3（1863）年、挙藩上洛計画の失敗により公正は

家督を譲らざるを得ませんでした。が、家の再興でその挫折にリベンジを果たしたのです。



由利公正の署名三種
（『子爵由利公正伝』より）

関連史料・ゆかりの地

秋田県 由利本荘市



由利本荘市の見所、鳥海山（同市観光協会HPより）

由利氏のふるさととしてその名を残す秋田県由利本荘市。秋田県の南端に位置します。合併前の旧由利町内には、由利公正の書、由利正通手植えの松、由利維平が藤原秀衡から拝領した刀等、新旧の由利家ゆかりの品々、スポットが多数残されています。

【鉄道】 東京→秋田（秋田新幹線 3時間45分）→羽後本荘（JR羽越本線45分）
【飛行機】 東京→秋田（50分）※秋田空港から由利本荘市まで車で約40分

参考資料等

三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社
三岡丈夫編『由利公正伝』光融館

世界都市を目指した

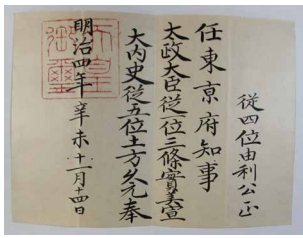
東京府知事、由利公正

（ニューヨーク等に肩を並べる街に）

廃 藩置県後の明治4（1871）年、由利公正は東京府知事に任命されました（当時43歳）。黎明期の東京府の礎を築いた一人に数えられる由利ですが、その足跡はどのようなものだったのでしょうか。

明治初期の東京の姿は、武家屋敷が整然と立ち並び、瓦が美しく連担した町並みでした。しかし、明治2（1869）年の版籍奉還等により諸大名は江戸を去り、武家との取り引きによって生計を営んでいた市民は生活に困窮し、人口は激減します。東京の道路にはごみが放置され、雨が降れば道路は膝までつかるなど、外国人から政府に対して苦情が絶えなかったといわれています。「帝都

東京」とは言っても、実態は近代化が遅れた未整備な都市でした。これら都市問題の解決が、府知事、由利に課せられていた使命だったので



東京府知事辞令
(福井県立歴史博物館蔵)

由利が府知事に就任してから半年後の明治5（1872）年2月26日、銀座一帯が大火となります。28万坪

が焼失し、5千戸が全焼、2万人が被災したと言われています。由利は、これを機に抜本的な都市改造が必要

だと考え、街路を思い切って広くすることや不燃性の煉瓦建築にすることなどを柱とする大がかりな不燃性都市化計画を提案しました。この時、由利と意見の対立を見せたのが当時の大蔵大輔、井上馨です。由利と井上は、ともに強烈な個性とプライドを持ち、大規模な計画を主張する由利と、多額の財政支出を望まない井上は意見が一致しませんでした。銀座の復興計画は、道路以外は話が進展しない状況となりました。井上は一計を案じ、同じ長州藩出身の伊藤博文と薩摩藩出身の大久保利通と謀り、由利を岩倉使節団に参加させたと言われています。府知事現職のまま渡米した由利は、明治5（1872）年7月、イギリスにおいて府知事を罷免されたことを知ります。銀座の復興計画はその後、井上とイギリス人ウォートルスの主導により進められ、明治11（1878）年秋に全体



井上馨肖像 (国立国会図書館蔵)

の建設が完了しています。

歴史に「もしも」は禁物ですが、もし、由利が渡米せず、知事のまま、東京府の復興計画を実施していたら、ニューヨークやロンドン、ワシントンを超える帝都東京が当時できていたかもしれません。

関連史料・ゆかりの地

東京都江戸東京博物館



模型「銀座煉瓦街」

ゆりきまさ
由利公正が取り組んだ東京不燃化計画。その結果生まれた銀座の姿を復元したジオラマが展示されています（常設展の展示「文明開化東京」）。江戸から現代へ連なる首都東京の誕生と経過を知ることができます。

【住所】東京都墨田区横綱1-4-1 (JR両国駅より徒歩3分)

日本初の アスファルト舗装に 挑んだ由利公正

由 利公正は、東京府知事を退いた後、様々な殖産興業に取り組みました。その一つがアスファルト（土瀝青）事業です。

由利は、明治5（1872）年5月から翌6（1873）年2月まで、岩倉海外使節団に同行し、欧米の政治や文化、産業に直に触れる機会を持ちました。帰国後、その見聞をもとに、福井での絹織物改良や東京都板橋区での乳牛飼育、群馬県での中小坂鉄山開発など殖産興業に積極的に取り組んでいます。それら事業の一つに、アスファルト事業があります。

明治10（1877）年頃、秋田県勧業課長から秋田産のアスファルト

の利用方法について相談を受けた際には、「パリにおいて実見した天然アスファルトであり、各国でも重要視しているもの。この土塊は良品なり。大いに利用に励むべし」と述べたといえます。欧米視察の際に、すでにアスファルト事業に着目していたことがうかがわれます。

その後、明治10（1877）年8月、東京上野で開催された「第一回万国勧業博覧会」の会場（園芸館）で、日本で初めてのアスファルト舗装に挑戦します。しかし、突貫工事と作業員の不慣れが原因で火災を起し、中断を余儀なくされました。

しかし、由利はあきらめません。翌年の明治11（1878）年、東京の神田川にかかる鉄製の昌平橋（旧

昌平橋。現在の昌平橋とは異なる）でアスファルト舗装工事に再挑戦し、ついに日本で初めて成功します。昌平橋は、由利自らが指揮を取って架橋し、舗装に使用したアスファルトは秋田県豊川村のもの200俵といわれています。天然アスファルトの活用を相談した秋田県民の思いを汲み、ここでも由利のかねてからの主張「民富めば国富む」を実践したのです。

日本初のアスファルト舗装がどこかについては、長崎市「グラバー園」内の道路と昌平橋との間で論争が繰り返されてきました。しかし、舗装専門家向けの書籍『新編』語り継ぐ舗装技術』（鹿島出版会）は、「同園の舗装道路はアスファルトではなく、コールタールを用いて」おり、日本初は昌平橋であると指摘しています。こうして、由利の名は昌平橋とともに歴史に記録されているのです。



由利公正肖像（岩倉使節団に同行した頃）
（三岡丈夫『由利公正伝』より）

自分の信念や信条をあくまで貫き、幕末明治期に多くの功績を残した由利。庶民のためにという思い、そして、先進的なものに挑戦し続ける姿勢は、殖産興業の足跡でもうかがい知ることができます。

関連史料・ゆかりの地

旧昌平橋



現在の万世橋（かつて旧昌平橋があった場所）

日本初のアスファルト舗装がなされた鉄橋として知られる旧昌平橋。工費をまかなう通行料として文久銭1枚（1厘5毛）を徴収したことから「文久橋」とも呼ばれました。この橋は、その後、東京府へ譲渡され、現在の昌平橋は、昭和3（1928）年にその上流に架けられました。その2年後、旧昌平橋の場所（まんせいばし）が造られています。

【住所】東京都千代田区外神田1丁目1-1（JR秋葉原駅より徒歩3分）

参考資料等

佐々木榮一『豊川ターレット物語』私家版
多田宏行『「新編」語り継ぐ舗装技術』鹿島出版会

ゆりきみまさ 由利公正を

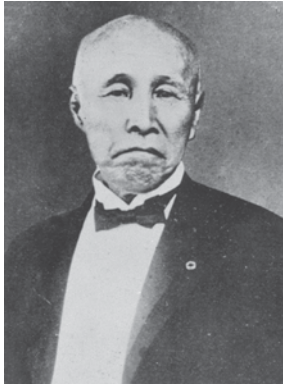
めぐる早慶戦

（早稲田、慶応の創始者と由利との関わり）

明 治初期の由利公正をめぐる早慶戦。とはいっても大学野球

ではなく、早稲田大学と慶応義塾大学をそれぞれ創設した大隈重信、福澤諭吉と由利の関係についてご紹介します。

まずは、大隈と由利。二人は、明治新政府の財政を担当し、それぞれの政策は二人の名前をとって「由利



大隈重信肖像（国立国会図書館蔵）



福澤諭吉肖像（国立国会図書館蔵）

財政（慶応4（1868）年〜明治2（1869）年）「大隈財政（明治2（1869）年〜4（1871）年）」といわれています。二人は共に明治初期の財政の危機を乗り切った貢献者ですが、財政に対する考え方は大きく異なっていました。

由利は横井小楠の国富論に学び、市中に資金を供給することで国全体の産業活動を活性化させることを目指していました。

指し、太政官札を発行しました。混乱期の通貨供給の手段として重要な役割を果たした太政官札でしたが、外国公使からは、太政官札が不換紙幣であること、乱発により信用が低下すること等の懸念が示されました。外交官出身で外国の矢面に立たされた経験を持つ大隈は、外国との関係に重点を置き、由利の後の財政担当として、幣制の確立などを行っていきました。

次に、福澤と由利。二人は、近い関係にありました。由利の長男、丈夫は福澤の姉の子（姪）と結婚しています。また、福澤が演説専用の「明治会堂」の建設（明治14（1881）年完成。後に明治生命や専修大学発祥の地ともなります。）にあたり、東京府知事を務めた由利の洋式邸宅（築地木挽町（現在の銀座））を購入していますが、これは二人の親密な関係があったからといわれています。

また、福澤は、明治13（1880）年、「交詢社」を創設します。「交詢社」は、学校教育を終えた社会人を参加対象とする日本最古の社交機関です（現在も活動を継続しています）。めざましく変化する実社会に対応するため、各人が互いの知識を交換し合っ、流動する社会の実務に対処

する機会を提供しようとしたのが設立の目的でした。由利は、実学を重視した福澤の考えに賛同し、三井中興の祖といわれる中上川彦次郎などとともに、「交詢社」常議員にその名を連ねています。

大隈と福澤、二人の由利との関わりを見ると、明治という新しい時代の日本をどう導くか、考え方の違いが現れてきます。

関連史料・ゆかりの地

明治会堂・専修大学発祥の地



明治会堂之図（専修大学蔵）

福澤諭吉らにより建築された演説会場「明治会堂」。由利公正の洋式邸宅を取得し作られました。ここは、その後、明治生命、専修大学発祥の地ともなります。今は、歌舞伎座裏の松屋通り沿いに「専修大学発祥の地」記念碑が残っています。

【住所】東京都中央区銀座3丁目14-13（歌舞伎座裏）（東京メトロ日比谷線東銀座駅より徒歩5分）

参考資料等

落合功「由利財政と第一次大隈財政」『修道商学』第46-2
明治生命保険相互会社『阿部泰蔵伝』

財政政策は

庶民の豊かな生活のため

（ぶれない心は晩年まで）

自分の人生を歴史に記すとしたら、あなたは、いつのどの出来事を語るでしょうか。

由利公正が晩年語った回想録から、その信念を読み解きます。

由利は、明治33（1900）年、72歳の時、「史談会」の会長に指名されました。「史談会」は幕末から明治初期にかけての歴史を当事者が生きている間に本人に語らせることにより記録を残そうとした組織で、明治22（1889）年に設立されました。由利が選ばれたのは、由利が当時の長州閥政権に反対しており、歴史を後世に残す過程で、薩長中心の記述をできるだけ抑制してくれる、史談会メンバーにそ

うした期待があったからだといわれています。

史談会では、例会を重ねて速記をとり、史談会速記録を発行し続けました。明治25（1892）年から昭和13（1938）年までの46年間、計411編が発行されています。由利は会長に就任する前から例会に招かれ、何度も証言していました。が、会長就任後はさらに積極的に発言しました。

由利の発言の根本は、現在の明治政府の財政は根本的に間違っており、自分が福井藩や明治元（1868）年の太政官札で試みた政策が正しかった。というものでした。明治26（1893）年1月に出版された由利の著書『迂拙草』で

も「天下未だ経済の道を講ぜず」と記し、自分が退いた後は、中央でも地方でも経済の道が行われていない」と現状を批判しています。

この由利の考え方は、由利が死去する前年の明治41（1908）年に出された「戊申詔書」に対する反応でも明瞭に示されました。戊申詔書は日露戦争後の国民の気風が華美に流れるのを警戒して、天皇が特別の詔を出したものです。由利といえども直接に詔を批判することはできないので、政府を批判して詔の訓戒に反対しました。国民に儉約を強いるのは政策の誤り。財政政策とは生産と消費を助けて国民に豊かな生活をさせること」というものでした。

経済の根本は節約ではなくて殖産。師、横井小楠から教わった由利の「庶民のため」の財政政策の考え

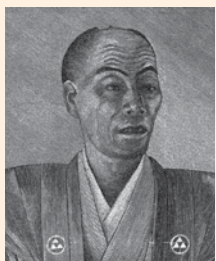


由利公正肖像（59歳）
（三岡丈夫『由利公正伝』より）

方は、福井藩や明治新政府で活躍していた時代のみならず、生涯を通して一貫していたのです。

関連史料・ゆかりの地

横井小楠寄留宅跡



横井小楠肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

由利公正が過去の功績で一番自信を持っていたといわれる福井藩の財政再建。それに大きな影響を与えたのが、熊本から福井に招かれた師の横井小楠でした。政治顧問であった際の寄留宅跡には現在、記念碑が建てられています。

【住所】福井市中央3-11-31（幸橋北詰）（JR福井駅より徒歩10分）

西郷隆盛が

信じ頼りにした男、 由利公正



NHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公、西郷隆盛。この西郷からの信認が厚かった福井の先人が由利公正です。

西郷は、安政5（1858）年から橋本左内と將軍継嗣問題に奔走しました。由利（当時29歳）は、同年4月、左内とともに江戸へ行き、左内を補佐する役目で一橋慶喜擁立運



由利公正肖像（東京府知事時代）
（三岡丈夫『由利公正伝』より）

動に加わっています。その後、井伊直弼が大老に就任し、徳川慶福が將軍に決定。安政の大獄が始まりました。西郷は、同年9月まで、薩摩藩士、有馬新七や諸藩有志と井伊の排斥（暗殺）を計画。有馬の著した『都日記』によれば、左内と由利が参画し、由利は仲間の水戸藩士を福井藩下屋敷の天井裏に隠し有馬との連絡役を務めました。しかし、危険を察知した福井藩は、同年10月由利を福井に送還します。

その後、由利は福井で藩財政の再建を実現し、坂本龍馬の推挙を得て明治新政府の財政担当の参与（現在の財務大臣に相当）となります。由利は手腕を発揮。西郷が成し遂げた

江戸城無血開城までの戦費は、由利が京都や大阪の商人にその趣旨を説明し集めた20万両で賄われました。また、由利の発案した日本初の全国共通紙幣「太政官札」が発行されると、西郷は戦地で、「太政官札の発行は朝廷の命令によるものだから、その支払いに不平を言う者がいたら切つて捨てよ。」と部下に命令したといわれています。戊辰戦争の西郷の進駐を支えたのは、由利だったのです。

太政官札発行後、療養のため福井に戻っていた由利は、明治4（1871）年、再び政府に呼び戻されます。由利を民部卿か大蔵卿に充てるという人事案もありましたが、由利の政敵、大隈重信を推す伊藤博文、井上馨らの意向を踏まえた大久保利通の意見が通り、7月、由利は東京府知事となります。西郷は、同月、府知事就任決定後に、由利の大蔵卿就任にあえてこだわった内容の書簡を大久保に送っており、由利の能力を高く買っていたことが知られています。

また、こんな逸話もあります。明治4年、新政府が新たな兌換紙幣を発行したものの、流通せず金融が閉塞状態となりました。西郷は、府知事の由利に「府庁で対策を講じてほしい。すべて（由利に）任せる。」

と命じます。由利は、西郷より「任せる以上は口を出させない。」と担保を取り、対策に乗り出しました。府庁で率先して購入し、価格調整（安定化）することで、新札の通用に道を開きました。

由利のよき理解者として、その能力を高く評価していた西郷。二人の結びつきは、將軍継嗣問題に始まり、明治初期の財政危機を乗り越えた「由利財政」を通じて強くなっていたのです。

関連史料・ゆかりの地

煉瓦銀座之碑



煉瓦銀座之碑（左）

明治4（1871）年に東京府知事となった由利公正。翌年の銀座大火を機に都市の不燃化に取り組み、銀座煉瓦街が建設されました。昭和31（1956）年、煉瓦が発掘されたのを機に煉瓦の碑が建てられ、由利の名は今も銀座の地に刻まれています。

【住所】 東京都中央区銀座1-11-2（地下鉄銀座線京橋駅より徒歩2分）

新発見「龍馬の手紙」に登場する

福井藩三人の関係

平 成29年1月13日、坂本龍馬の手紙が新たに発見されたニュースが大々的に報道されました。報道では、龍馬の「新国家」建設にかけける情熱と周到な根回しに焦点が当てられましたが、改めて、福井藩の幕末明治に果たした役割も注目されました。新発見の手紙に登場する中根雪江、松平春嶽、由利公正はどのような関係にあったのでしょうか。

発見された手紙は、龍馬から、福井藩の重臣で春嶽を側用人として補佐した中根宛てられたものです。慶応3（1867）年11月10日に書かれたとされる手紙には、こう記されています。先頃直接申し上げて

おきました三岡八郎（後の由利公正）兄の上京、出仕の一件は急を要することと思っておりますので、なにとぞ早々に（福井藩の）ご裁可が下りますようお願い奉ります。三岡兄の上京が一日先になったならば新国家の家計（財政）の成立が一日先になつてしまふと考えられます。ただ、この所にひたすらご尽力をお願いいたします。

当時、由利は、挙藩上洛計画の中止により、文久3（1863）年から蟄居の身にありました。『由利公正伝』では、当時の状況について、「龍馬との福井での会談以降、再三、新政府側から招へいの手紙が届いたにも関わらず、知らされることがなく、



中根雪江肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

12月半ばになってようやく派遣の決定が下された。この復権遅延は、守旧派の嫉視。」と記しています。

この背景には、挙藩上洛計画を巡る守旧派・改革派の対立があったとされます。挙藩上洛計画は、由利や横井小楠が中心になって計画したもので、藩を挙げて武装し、京へ上り、一挙に攘夷派を一掃、国論を開国に向けて統一しようとするものでしたが、これに反対したのが、今回の手紙の宛先である中根でした。中根ら守旧派は、幕府を無視する行動や藩を危うくする行動は慎むべきだと主張しました。実は、春嶽も改革派の動きを警戒していたとされ、「君臣の名分を重んじることなく、幕府をないがしろにし、藩主を軽んじ、…」（松平春嶽末公刊書簡集）として、改革派を批判する内容を書簡に記しています。

この対立の本質は、藩と国家のいずれに重きを置くかの問題だったといわれています。国家を思い行動を

起こしたものの挫折した由利。その思いは、今回発見された手紙に龍馬が記した「新国家」の下で、発揮されていくことになるのです。

関連史料・ゆかりの地

恒道神社



まつたいらしゆんがく 松平春嶽を祭神とする福井神社。その境内左手にあるのが恒道神社です。春嶽の側近として藩政改革や幕政改革に関わった中根雪江が、はしもとさない 橋本左内、鈴木主税とともに祀られています。時代を経てもなお、春嶽を支えているようです。

【住所】 福井市大手3丁目16-1（福井神社境内）（JR 福井駅より徒歩9分）

参考資料等

三岡丈夫編『由利公正伝』光融館
三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社、福井市立郷土歴史博物館編『松平春嶽末公刊書簡集』

「五箇条の御誓文」に

つながる二人の先人

横井小楠、坂本龍馬、由利公正

明治新政府の基本方針を示した「五箇条の御誓文」。このルーツをたどると三人の人物が浮かび上がってきます。

まずは、由利公正の師ともいえる横井小楠。熊本藩士だった小楠は、福井藩の求めに応じ、藩校明道館の顧問に招へいされます。小楠は、福井藩の藩是として民富論を示した「国是三論」を起草していますが、「国是七条」や「国是十二条」では、人材を広く登用し、議会政治を実現することを求めています。

安政6（1859）年、文久2（1862）年の2回にわたり、由利は熊本の小楠宅を訪ねています。1回目の道中は小楠に同行しての訪

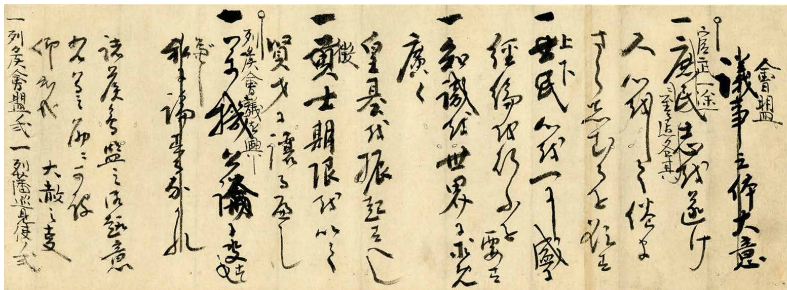
問でした。小楠は酒好きといわれており、二人は、毎夜酒を酌み交わしながら、国の在り方などを議論をしたといわれています。

次に、幕末の土佐のヒーロー、坂本龍馬です。龍馬は三度福井藩を訪れ、松平春嶽や由利らと面会しています。それぞれの滞在期間中、龍馬は海軍操練所の建設に必要な資金5千両を借り受けたたり、由利と葺屋旅館で朝から夜まで日本の行く末を語り明かしたりしました。

龍馬は、春嶽から小楠を紹介されました。龍馬は小楠に惚れ込み、熱心に教えを請ったといわれています。龍馬が作った新政府の基本方針でも、上下議院の設置による議会議

治が記されています。また、後に由利は新政府の財政担当に招へいされますが、これは龍馬の強い推挙によるものでした。

最後に由利公正。由利は、小楠の教え、龍馬の思いを受けて、民を思いう「議事之体大意」を起草しました。その第一条では、「人民に志をかなえる機会を与え、投げやりになることのないようにしたい」と身分制を乗り越えた四民平等の理念を記しています。また、第2条では、「武士



議事之体大意（福井県立図書館蔵）

も平民も協力して産業を興さなければならぬ」と民も国の主役であることを明示しています。さらに、第5条では、「天下の政治は世論の方向に従って決め、私に論じてはいけない」と国家の政治は公議公論によるべきとの考えを記しています。

その後、木戸孝允らの修正案を経て「五箇条の御誓文」が取りまとめられました。新政府の基本方針は、こうした福井ゆかりの人たちの思いが反映されている部分が多いといえるでしょう。

関連史料・ゆかりの地

福井城内堀公園



旅立ちの像

福井県庁のお堀に面した公園。横井小楠と由利公正と一緒に九州へ旅立つ姿を表現した「旅立ちの像」があります。旅の目的は、長崎での物資販売ルートの開拓といわれています。

【住所】福井市大手3丁目（JR福井駅より徒歩5分）

参考資料等 三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社 福井県立図書館編『五箇条の御誓文と由利公正』

蛰居中も天下国家を

論じた横井小楠

（土道忘却事件とその後の生き方）



横井小楠肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕 末明治の福井の先人、由利公正が師と仰いだ熊本藩士、横井小楠。小楠が一時期政治生命を絶たれた大事件が「土道忘却事件」です。

文久2（1862）年12月19日夜、福井藩政治顧問の小楠が、熊本藩江戸留守居役吉田平之助の別邸（現在の東京都中央区）において、肥後勤王党の刺客に襲われました。小楠は大小の両刀を備えておらず、約1キロ離れた福井藩邸まで刀を取りに戻ります。しかし、小楠が戻った時には既に刺客の姿はなく、吉田は重

傷を負っていました（2か月後、吉田はこの怪我が元で死亡）。熊本藩では、小楠が敵前逃亡し、土道を忘却したと憤り、福井藩に身柄の引き渡しを要求しました。



松平春嶽肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

す。しかし、その後起きた福井藩の挙藩上洛計画の失敗により、文久3（1863）年8月、小楠が熊本に戻ると、あらためて熊本藩の詮議を受けます。春嶽は穏便な処分を願いますが、熊本藩ではこれを拒み、小楠は士分や家禄をはく奪された上、沼山津の四時軒で蛰居することになりました。

蛰居中の小楠の暮らし向きは、福井藩がその状況を知って生活費の援助（春嶽は100両の大金を送ったといいますが）を行うほど厳しかったようですが、小楠の自分も学び人を教えようとする熱意は衰えることなく、門人のほか農民などに対して、講義を行いました。さらに、国の政治の成り行きには常に気を配っており、小楠の長女みやは、母から「お父様はどんな時でも天下国家のことを忘れなかつたよ」と度々聞かされたといえます。諸藩有志の来訪や意見を問う密書も少なくなく、坂本龍馬が勝海舟の指示で数度にわたり沼山津を訪れた話は有名です（勝は「天下で恐ろしいものを二人みだ。それは小楠と西郷だ」と評しています）。蛰居の身にあっても、論策家としての彼の名は全国諸藩に響いていたのです。

小楠は、蛰居中、来訪した井上

毅（後の文部大臣）に対して「いかに多くの知識を得ても、活用しなければ意味がない」と語ったといえます。理由は違いますが、由利も、文久3（1863）年から蛰居となりました。ともに苦しいときを過し、国の行く末を思った師弟。王政復古後の維新政権の下で、徴士参与として、二人は政治の表舞台に再び登場することとなります。

関連史料・ゆかりの地

四時軒



熊本市にある横井小楠の旧居、四時軒。四季の眺めが素晴らしいことから、その名が付けました。坂本龍馬や由利公正のほか諸藩の有志らが訪れ政局を語ったといわれています。熊本地震で被害を受けた四時軒、復旧が望めます。

【住所】熊本市東区沼山津 1-25-91
(熊本交通センターより熊本市バス「秋津小楠記念館前」下車徒歩5分)

参考資料等

三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』新人物往来社
菅秀隆『横井小楠—その業績と生涯—』くまもと市政だより

福井の先人を

支えた女性たち

〈逸話の中に見えてくる先人の原点〉

福井の先人、松平春嶽、梅田雲浜、由利公正の活躍を支えた3人の女性にスポットを当てます。

最初に、福井藩主、松平春嶽の正妻、勇姫。

勇姫は、熊本藩主、細川斎護の三女で、春嶽13歳、勇姫7歳の時、2人は婚約しています。その後、当時全国的に猛威を振っていた天然痘に罹患。一命はとりとめたものの、顔に「あばた」が残ったことから、細川家は、婚約解消を申し出ます。しかし春嶽は、「いったん婚約した以上は、相手がどんな身体になろうとも結婚する。」と返答し正妻に迎えました。

福井藩に輿入れした勇姫は、和歌



や読書をよくして教養を深めたほか、藩の家政分野での儉約を勧めました。また、熊本藩より横井小楠を招へいする際、藩主である父親にかけ合つたといえます。春嶽の進めた財政改革や人材登用の裏には勇姫の内助の功があったと言えるかもしれません。



琴を弾く春嶽の正室・勇姫 (福井市立郷土歴史博物館蔵)

次に、尊王攘夷の指導者、梅田雲

浜の妻、信子。

信子は、大津の儒学者上原立斎の娘で、こんな逸話が残っています。小浜藩を追われ貧しい日々を送っていた雲浜ですが、家に儒学者を招き接待しなければならなくなりました。信子は自慢の琴を質に入れ酒代に変えたものの、客が信子の琴を聞きたいと言いつ出したため、着ていた着物を質に入れて琴を請け出し、襖の外で襦袢姿で琴を弾いたということです。信子は雲浜が全国を飛び回る中、病床に伏し、29歳の若さでその命を終えますが、美人の誉れ高く、夫に尽くし、困窮した梅田家を支えたと伝わっています。

最後に五箇条の御誓文の草案の起草者、由利公正の母、幾久。

幾久は、三岡家の貧しい家計を当時一人で切り盛りしており、女中を雇うことなく、家族の衣服一切を手織りで縫い、自家菜園で収穫した野菜等で食卓を賄いました。母の草むしりを手伝いながら由利は考えるようになります。農民は田畑を耕し生計を立てるが、武士は一体何を生み出しているのか。武士は一体何の役に立っているのか。この経験が、「武士の本分とは領民への慈しみである。『民富めば国富む』の由利の信念の基になります。領民の生活を

第一に考える由利の原点は母、幾久にあつたのかもしれない。

関連史料・ゆかりの地

由利公正宅跡



母幾久とともに暮らした由利公正邸。坂本龍馬も横井小楠の案内で足羽川を渡り、訪ねたといわれています。実際の家の場所は、明治の河川改修工事により川の中に消滅し、今は、堤防に石碑が残るのみです。

【住所】福井市毛矢2丁目(幸橋南詰下流側)
(JR福井駅より徒歩11分)

参考資料等

東郷周一郎編『慶永公御実』私家版、和順高雄・シュガー佐藤『幕末福井伝 翔る志』福井県三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社

まつだいらしゅんがく
松平春嶽を

教え導いた

すずき ちから
鈴木主税



鈴木主税肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

西郷隆盛が敬慕し、諸国の志士が、教えを請いに訪ねたことで知られる水戸の尊王攘夷の思想家、藤田東湖。彼から、「豪傑」として西郷と並び称された人物が鈴木主税です。

文化11(1814)年、主税は福井藩士、海福正敬の子として生まれ、後に鈴木長恒の養子となります。多感な青年期に福井藩の儒学者、清田丹蔵に政治的実践を重視する崎門学を学びます。天保13(1842)年に寺社町奉行に就任した主税は、公平公正な行政手腕で城下の町民

から慕われ、その功により、弘化2(1845)年、福井藩主、松平春嶽の側近に取り立てられます。主税は、藩主である春嶽の成長が福井藩を立て直すことにつながると信じ、厳しく教育したといえます。「慶永公名臣建言録」には、こんなエピソードが残っています。

ある日春嶽は、家臣に対して「庭の手入れは当分必要ない」と命じましたが、間もなく「手入れをしろ」と命じました。それを聞いた主税は春嶽の発言の矛盾を指摘。領民の悩みや苦しみよりは、よほど庭木の方が大切であるようにお見受けいた

します」と述べ、藩主として、今、何を優先すべきか、厳しく戒めました。後に春嶽は、「眞雪草紙」の中で、主税のことを「私を補佐してくれた忘れることのない恩人」と述べています。春嶽が幕末の政治に重きをなし、明君と称されるに至ったのは、主税など家臣たちの教育の賜物だったのかもしれない。

嘉永6(1853)年6月、ペリーが浦賀に来航。開国か攘夷か、国論を二分する事態のなか、主税は江戸に赴きました。主税は春嶽に「大いに民風を振り起こし、国防を充実し、国家の威信を發揚せねばならぬ」と建言し、以後、春嶽の側近として將軍継嗣問題など国事の処理に携わっていきます。

この頃の諸藩の名士たちとの交流の中で、こんなエピソードが残っています。主税は、水戸藩の藤田東湖、熊本藩の長岡監物らと腹を割って諸外国への対応を論じ合いました。東湖は主税について「真に豪傑と称すべき者、天下にただ鈴木主税と西郷隆盛のみ」と、また、監物は「智徳兼ね備わるは主税に及ぶ者はなし」と称賛したといわれています。

安政3(1856)年2月、主税は43歳でこの世を去ります。その時、主税は側にいた橋本左内に対して

「私の志を遂げるのは君しかいない。天下のため活躍を願う」と後事を託します。春嶽や左内らに受け継がれた主税の志。その一つ一つは、幕末から明治の大改革の道標となったに違いありません。

よなぶり
世直神社
関連史料・ゆかりの地



(写真は福井市みのり1丁目)

すずきちから
鈴木主税は、木田荒町の町民にのみ課せられていた悪税「あおだ(※)」を撤廃したことから、町民から「世直大明神」として崇拝され、生前に生き神として祀られました。昭和に入ると、みのり3丁目にもう一つ世直神社が建立されました。

※「あおだ」…町で行き倒れた旅人を本籍地に送り返す費用等を地域が負担する税

【住所】
福井市みのり1丁目(福井鉄道商工会議所前駅より徒歩5分)
福井市みのり3丁目(福井鉄道商工会議所前駅より徒歩7分)

マルチな才能を

発揮した

佐々木長淳



佐々木長淳肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕 末期に西洋式の鉄砲や大砲の製造に携わり、明治維新後は、繊維産業の近代化に貢献するなど、終生にわたり多彩な才能を発揮した福井藩士、佐々木長淳。

天保元（1830）年、長淳は、福井藩士、佐々木長恭の子として生まれます。幼い頃から絵が得意であつたといわれており、幼馴染みであつた橋本左内の死後に肖像画も書いています。一方で、優れた剣士としての一面も有していました。福井藩主、松平春嶽の側近である中根雪江から「勇邁の気性あり」と称されるほど、その腕前は相当なものでし

た。様々な分野で才能を開花させた長淳、その万能ぶりがわかるエピソードが残っています。

嘉永7（1854）年、25歳の長淳はペリーの黒船が再来航した際に、藩から偵察を命じられ密かに黒船に乗り込むことに成功します。長淳は英語が喋れないため手まねでアメリカ人士官にお願いし、船内や大砲を得意の絵で書き写しました。これだけにとどまらず、長淳は差していた長刀に興味をもった将校らの求めに応じ剣技を披露します。長刀を縦横に振り回し、縦切り、横なぎ、

突きなど実践さながらの技を繰り出し、さらに厚い紙をたくさん重ね寸断して見せました。その様子を見た士官たちは舌をまいたといわれています。長淳は優秀な技術者としての顔だけではなく、雪江が評したように勇敢な剣士としての顔も持ち合わせていたのです。

西洋の先進的な技術に触れた長淳は、その後、西洋式の鉄砲や大砲、火薬の製造責任者となり技術改良や大量生産に取り組んだほか、日本人で初めてアメリカに渡ったジョン万次郎に助言を受け、西洋式帆船「一番丸」を建造するなど数々の功績を残しました。

また、軍事関連だけではなく更に幅広い分野に才能を発揮します。文久2（1862）年に、春嶽は日本ですべて初めて自転車（ビラスビイデビクス）に乗ったとされていますが、この自転車を組み立てたのも実は長淳なのです。

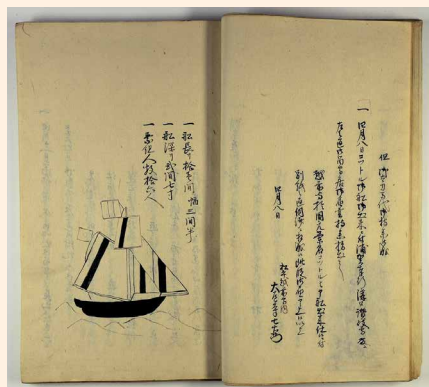
明治維新後は、長淳は養蚕や紡績関係の官僚として新政府に参加し、養蚕や紡績の研究調査と指導を行い、蚕の病虫害研究に力を注いだほか、日本人技術者が初めて手掛けた近代的工場である「新町屑糸紡績所」の建設に携わるなど、繊維産業の近代化に尽力しました。

大正5（1916）年、長淳は87歳でその生涯を終えますが、長淳の志は息子の佐々木忠次郎に受け継がれます。忠次郎は近代養蚕学の先駆者として、父と同じように近代繊維産業の発展に大きな功績を残しているのです。

関連史料・ゆかりの地

佐々木長淳が製作した洋式帆船「一番丸」

長淳が製作した洋式帆船「一番丸」に関する史料（119 越前世譜 茂昭様御代）
(松平文庫(福井県立図書館保管))



安政6（1859）年、佐々木長淳は洋式帆船「一番丸」を完成・進水させました。16人乗りで全長20メートルの一番丸は同年4月に試験航海のため三國湊を出帆し、同年6月に江戸湾に停泊しました。

さいごうたかもり
西郷隆盛と心のうちを

打ち明けあった

むらたうじひさ
村田氏寿



村田氏寿肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

NHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公、西郷隆盛。この西郷が心を許した福井の先人が村田氏寿です。

氏寿は、福井藩主、松平春嶽に側近として仕えた人物で、廃藩置県後の初代の福井県参事（現在の知事）を務めたほか、明治新政府では、日本の警察制度創設に尽力したことで知られる人物です。

氏寿と西郷、二人のエピソードが西郷が書いた書簡に残されています。安政4（1857）年3月、氏寿（当時37歳）は春嶽の命を受け、

熊本の著名な政治学者、横井小楠の招へいのため福井を立ちました。その際、氏寿は春嶽から薩摩藩主、島津斉彬あての手紙を預かっており、熊本から鹿児島まで足を延ばします。春嶽と盟友であった斉彬は参勤交代で薩摩に帰国していました。氏寿は鹿児島到着後、斉彬への拜謁を希望しますが、その願いはなかなか叶いません。そんな中、閏5月2日夕刻、氏寿は西郷と初めて対面します。親しく歓談したその翌日、西郷は氏寿に次のような書簡を送ります。「昨夕はゆるゆるとご高話を承り、誠に清々しい気持ちでした。

ご面会して心のうちを打ち明けてしまい、かえって卒爾の至りです。何とぞご容赦ください。さて、承った件（斉彬への面会）、今日にはお達しがあるでしょう。主君の手元からのお達しですので、ご伏蔵なくご糾問してください。…。この手紙によると二人は面会して打ち解け、話はずんだようです。また、その際、軽率な言動があったのではと反省の弁も述べています。

西郷は、同時に斉彬側近の市来正之丞にも書簡を送り、氏寿が拜謁を急いでいるので、関係者に話を通してほしいと頼んでいます。氏寿と歓談すると同時に、斉彬への拜謁実現のために手を尽くしていた事実から、西郷の微に入り細を穿った性格の一端を知ることができます。

その後、氏寿は、西郷の盟友で、後に敵対した大久保利通の下で新政府の内務大丞兼警保頭（現在の警視総監）となり、全国に広がる警察網の整備や指導監督に当たりました。この頃、大久保と極めて親しく、よく碁をしたという逸話も残っています。氏寿は、明治9（1876）年から、続発した不平士族の反乱（秋月の乱等）の鎮圧に当たりますが、翌年1月、一切の公職を離れます。その後、最大規模の士族反乱、西南

戦争が起きます。氏寿は、これを鎮める立場で西郷と戦場で対峙することはありませんでしたが、西郷死すの報に触れ、20年前の歓談の時を思い出したかもしれません。

関連史料・ゆかりの地

福井県立図書館



統再夢紀事

(松平文庫 (福井県立図書館保管))

福井藩政資料などを多く所蔵する福井県立図書館（松平文庫）。村田氏寿が執筆した『統再夢紀事』も所蔵されています。春嶽の政事総裁職就任と辞任、四侯会議、大政奉還直前の駆け引きなどが記載された重要な歴史書（全22巻）も氏寿の功績の一つです。

【住所】 福井市下馬町51-11 (JR福井駅よりフレンドリーバス「県立図書館」下車)

貧しくとも

心豊かに生きた

歌人、橘曙覧



橘曙覧肖像(寿像)
(福井市橘曙覧記念文学館蔵)

『万葉集』などの古歌に学び、日常の生活を題材にした赤裸々な作風で知られる幕末福井の国学者・歌人、橘曙覧。その歌と清貧の生活に共鳴した松平春嶽は彼を歌の師と仰ぎました。春嶽をはじめ多くの人を魅了する曙覧の歌や生き方は、どのような秘密があるのでしょうか。

曙覧は、文化9（1812）年、旧福井城下石場町（現在の福井市つくも1丁目）で、文具などを扱う商家に生まれました。「橘」は氏で、奈良時代の政治家・歌人として知ら

れる橘諸兄が遠祖と伝わっており、曙覧の苗字は「正玄」です。その正玄家の後継ぎとして育ちますが、早くに父母と死別し、学問を志すようになり、家督を異母弟の宣に譲って愛宕山（現在の足羽山）に隠棲。妻子を持ちますが、学問と和歌に打ちこんでいきました。天保15（1844）年、曙覧の歌人としての方向を決める契機が訪れます。曙覧（当時32歳）は国学を学ぶため、飛騨高山の田中大秀の門に入りました。大秀は国学四大人の一人、本居宣長の高弟です。実は、『万葉集』を特に尊ぶ曙覧の志向は、大

秀という人物を通して本居学から学んだものでしょう。曙覧は宣長を非常に敬慕しました。その敬慕の大きさは、大安禅寺にある曙覧の奥墓が宣長のそれに模して造られていることにも表われているとみられます。

嘉永元（1848）年、曙覧は足羽山から三橋町（現在の福井市照手2丁目）に居を移し、新宅を藁屋と称しました。その後、元治2（1865）年、中根雪江らを介して和歌のやりとりをしていた春嶽は曙覧の藁家を訪ねます。春嶽は曙覧に「家の名を「わらや」と呼ぶのはふさわしくない。ひたすら古典を通して昔の心を忍ぶ家と改めるがよい。貧しいけれども曙覧の心は風流を理解し優雅である。これが大変慕わしい」と伝えました（『橘曙覧の家』）。曙覧は歌人であると同時に国学者であり、国学の裏付けがあったからこそ、自由に生き自由に詠みました。そして、そこから発した人生観によって清貧といわれる生活に身を置いていたのです。こうした姿は、身分を越えて春嶽の心を打つものだったのです。曙覧は、生涯を通じ多くの文人と

も交流して福井において歌で一家を成しましたが、あくまでも中央歌壇からは孤高の立場をとり続け、慶応4（1868）年8月、明治改元を目前にしてこの世を去りました。その後、長男井手今滋により刊行された遺歌集『志濃夫廼舎歌集』によって、その作品は全国に広く知られ、正岡子規・釈迺空（折口信夫）など多くの後進から近世末期の代表的な歌人として高い評価を受けています。

関連史料・ゆかりの地

橘曙覧他一家奥墓



橘曙覧の希望によって、彼が晩年に住職や地元の人々と親交が深く、またその風景をこよなく愛した大安禅寺の境内に葬られました。曙覧の妻、直子や親族の墓もあります。

【住所】福井市田ノ谷町
(JR 福井駅より京福バス鮎川線・川西三国線で約30分「大安寺門前」下車徒歩20分)

橘曙覧『志濃夫廼舎歌集』『和歌文学大系74』明治書院、足立尚計「橘曙覧の国学と和歌」『明治聖徳記念学会紀要』復刊17号
足立尚計「橘曙覧と国学」(NHK放送局編『わたしの橘曙覧論と平成独楽吟』「和歌のまちづくり事業」実行委員会)
足立尚計「松平春嶽と文学」(三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』新人物往来社)

参考資料等

執筆・協力

福井市立郷土歴史博物館 館長 角鹿 尚計

弟同士の交友

橋本綱常と西郷従道

〜兄と同じく偉大な功績を残した二人〜

橋 本左内と西郷隆盛は將軍継嗣問題を巡る対応で交流を深め、隆盛が左内の手紙を自身が死ぬ間際まで持っていた逸話が残るなど親しい間柄でしたが、それぞれの弟、橋本綱常と西郷従道も親交があったといわれています。

綱常は、弘化2（1845）年6月、福井藩藩医の橋本家の四男に生まれます。兄左内と同じく儒学者吉田東篁に学びました。8歳で父と死別し、安政2（1855）年、11歳の時、左内が藩医を辞して福井藩御書院番になると、家業を継承し藩医になります。

一方、従道は、天保14（1843）年5月、隆盛の15歳年下の弟として



西郷従道肖像
(国立国会図書館蔵)



橋本綱常肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

生まれます。9歳のとき両親と死別し、兄隆盛を親代わりとして成長しました。

二人のつながりは、陸軍時代に始まります。綱常は、明治10（1877）年7月に陸軍軍医監・本病院に就任後、軍医総監・軍医本部長、陸軍省医務局長と陸軍の軍医として地位を高めました。一方、従道は明治2（1869）年、山縣有朋と兵制研究のため渡欧（プロイセン、フランス、ロシア）。帰国後、兵部権大丞陸軍少将、陸軍大輔など出世し、明治11（1878）年には陸軍卿となります。西南戦争では兄に組せず、政府に留まりました。

二人には、こんな逸話が残されています。従道は自邸の引越しをした際、思いをこめて育てた大切な庭木を全て綱常に譲ることにしました。従道は平河町の綱常の家を訪れ、自ら庭師を指揮して植樹をさせたといわれています。当時、庭木を譲るということは、真に遠慮のない心の通じた交際をしていたということの表れでもありました。

その後、綱常は当代一の名医として知られるようになります。従道は綱常の診断をししばしば受けており、心身ともに良き理解者としてその関係は続いていきました。この他、伊藤博文や井上馨、山縣等も診察を受け、中には、あの左内の弟に会えると懐かしがって訪れる元勳

関連史料・ゆかりの地

橋本左内生家跡



福井を代表する幕末の志士、橋本左内。現在、その生家跡には民家が建っていますが、左内の産湯に使われたという産湯井戸跡や、啓発録の石碑が今も残されています。弟の綱常も同じ地で生まれています。

【住所】福井市春山2丁目（福井鉄道仁愛女子高校駅より徒歩5分）

もいたといえます。綱常は明治20（1887）年には、日本赤十字社病院の初代院長にもなっています。また、従道は明治27（1894）年に海軍大将となり、内閣総理大臣にも再三推される人物となりました。

明治期に近代日本の基礎固めを進めた二人。その功績が兄たちに引けをとらないだけに、兄と同様に親交があったことが不思議な縁に感じられるエピソードです。

命がけで天然痘に

てんねんとう

立ち向かった

かさはらはくおう

笠原白翁



笠原白翁肖像（福井市立郷土歴史博物館蔵）

が春嶽の手に到達し、事業の有益性が認められます。

その背後には、侍医で白翁の同志の半井仲庵の働きかけがあったともいわれています。また、春嶽の先見性がなければ認められなかったでしょう。春嶽は過去に全治1年以上となる疱瘡にかかったことがあり、病の恐ろしさを知っていたこともあり、道中ですでに痘苗が京都に到着していることを知ります。そして、京都、大坂の除痘館開設に尽力した後、福井へ旅立ちます。

嘉永2（1849）年には、長崎に痘苗が到着。白翁は、長崎に向かう道中ですでに痘苗が京都に到着していることを知ります。そして、京都、大坂の除痘館開設に尽力した後、福井へ旅立ちます。

痘苗は成分を維持し続けるためには人から人へ植え継いでいく必要があります。白翁は痘苗を福井に持ち帰るため、種痘をした子供たちを連れ京都を出ます。道中の栃ノ木峠には2メートル近く雪が降り積もり、何度も遭難の危機に遭いながら、まさに命がけで痘苗を福井に届けたのです。

嘉永2（1849）年12月、仮除痘所を福井に開設。その2年後、公

立の種痘所が開設されました。福井藩の種痘所は他諸藩よりかなり早く、これは医学における先進性を物語っています。種痘を公営事業とすることに尽力した白翁の熱意と、それを理解・許容した春嶽の二人が成し遂げた偉業だったのです。

翁の「白」はオランダ語のハクシン（ワクチン）の「ハク」だと言われています。種痘の普及に命をかけた男に相応しい名前といえるのではないのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地

種痘所「除痘館」跡地



福井に痘苗を持ち帰った笠原白翁は苗を断絶させないために、隣家に除痘館を設け種痘を開始しました。白翁の藩への働きかけもあり嘉永4（1851）年に公営の除痘館が開設されました。

【住所】福井市春山1丁目（JR福井駅より徒歩約15分）

笠原白翁は、文化6（1809）年、町医者の子として足羽郡深見村（現在の福井市）で生まれました。28歳の時、加賀の大武了玄と出会い西洋医学の素晴らしさを知り、32歳の時に蘭方医の第一人者であった日野鼎哉のもとで学びました。

弘化2（1845）年、30万人（当時の人口の1%）もの死者を出していた伝染病、天然痘について牛痘種法という予防法があることを知ります。翌年、白翁は、痘苗（ワクチン）を輸入しようと福井藩主、松平春嶽

に請願書を提出します。

請願書には、飢饉、戦争、疫病は国家の三大厄難。その中でも、疫病は最も人命を奪い、国力を弱める」とし、国家の視点に立ち、その必要性を論じました。白翁は、経費をすべて自分で負担するとまで記載し、その熱意を表します。しかし、請願書は役人の手に留められ、春嶽の手に届きませんでした。一介の町医者が藩主に対し、請願書を出すなど異例中の異例と考えられたのでしょう。

嘉永元（1848）年、白翁は2回目の請願書を提出。今回は請願書

「裏の雪爪」と称された

春嶽の禪師、

鴻雪爪



鴻雪爪肖像（「方外功臣鴻雪爪」より）

福 井藩初代藩主、結城秀康の最
初の菩提寺として知られる孝
頭寺。幕末にこの寺の住職を務め
た名僧、鴻雪爪は福井藩主、松平
春嶽と関係の深い人物です。

雪爪は、文化11（1814）年1
月1日、備後国（現在の広島県）因
島に生まれました。6歳で出家。そ
の後、府中（現在の越前市）の龍泉
寺等で修業し、弘化3（1846）
年、33歳で大垣の全昌寺の住職とな
りました。その名声は全国的に高く、
老人では宇治興聖寺の回天、若手
では大垣全昌寺の雪爪」と言われた

といえます。
安政5（1858）年、45歳の時、
雪爪は春嶽の要請に応じ福井城下の
孝頭寺の住職となります。当時、福
井藩は、春嶽主導の藩政改革を進め
ており、雪爪が入山した翌月には、
熊本から横井小楠を政治顧問として
迎えました。雪爪は、藩政改革に協
力し、家老、本多修理をはじめ中根
雪江、三岡八郎（後の由利公正）ら
と盛んに論じあい、彼らを啓発した
といえます。
雪爪は回想の中で、考え方が古
く、新しいものを受け入れない頑固
な者も多かった。小楠は表面より勉

めて説き入り、私は陰に裏面より
薫陶した」と述べています。春嶽は
小楠に藩政改革を託し、雪爪は裏方
として支えていたのです。この連携
は続き、春嶽の政事総裁職時代に
は、小楠が春嶽のブレーンとして表
から、雪爪が文通や藩の要人を通じ
て、陰から助言を行ったといわれて
います。

文久3（1863）年3月、春嶽
は政事総裁職を辞し、福井へ戻りま
す。春嶽はしばしば雪爪を訪ね、禪
の指導を受けたといわれています。参禅の
問答の中で、春嶽は、仰げばいよ
いよ高く、鑽ればいよいよ堅し（物
事の本質は、それを実際に触れなけ
れば分からない）と気付いたと伝
わっています。慶応3（1867）
年12月、王政復古の直後に新政府と
旧幕府側が対峙した際、春嶽は衝突
回避のため沈着・果断に動きますが、
これはまさに雪爪から禅の奥義を得
ていたから為せたのではないでしょ
うか。

雪爪は、約10年間、福井に滞在し
た後、近江彦根の清涼寺住職となり
ます。その後も春嶽との繋がりには続
き、春嶽の推挙で、明治新政府に出
仕しました。大教院（神仏合同布教
機関）の初代院長として、神道、仏
教を国教と定めるなど宗教界の改革

事業に尽力します。多くの人材を抜
擢してきた春嶽。雪爪もまた春嶽に
見出され、表舞台に立ち活躍した一
人なのです。



松平春嶽肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

関連史料・ゆかりの地

孝頭寺



福井藩祖結城秀康の菩提寺として、慶長6（1601）年に建立された孝頭寺。
鴻雪爪が住職を務めていた時には、由利公正や堀正直、松平正直など明
治に入っても活躍した優秀な人物がしばしば山門をくぐったということです。

【住所】福井市足羽1丁目7-16（福井鉄道足羽山公園口駅より徒歩5分）

参考資料等

澤井常四郎『方外功臣鴻雪爪』三原図書館、三上一夫『幕末維新と松平春嶽』明治維新史学会
福井新聞社編『福井人物風土記』昭和書院

春嶽が寵愛した 三国湊の彫刻家、 島雪斎



幕 末期、北前船の交易により、福井藩唯一の外港として栄えた三国湊。その繁栄に支えられた工芸の一つに三国木彫があります。島雪斎は、この三国木彫の志摩派の祖、志摩乗時の高弟で師からは、「我れ門人多しといえども彼に及ぶものなし」と言わせるほどの腕前でした。その作品は彫出の写実性に優れ、彫刻の本質として欠くことのない立体的な物の捉え方が秀逸だったといわれています。

雪斎は、その高い技術力から御用職人に取り立てられ、福井藩主、松平春嶽が京都へ上洛した際には、雪斎作の紫壇の書棚が朝廷に献上され、法橋の官（僧侶に準じて与えら

れる称号）を賜ったことでも知られています。

雪斎の傑作の一つ、「木造神馬像」は、今も三国神社（坂井市）の神馬堂に収められており、その像には、こんなエピソードが残っています。明治元（1868）年、雪斎は三国湊に外国産馬が船で入港したことを知り、毎日通いつめて神馬像を制作していました。ある日、三国まで来た春嶽が、雪斎の邸宅の前を通り、「このような大きなものを一人で刻むのか」と声をかけたといいます。この時、春嶽の馬が三度いななきました。春嶽は、像が生き馬のようであったことから、わが馬に「おまえの連れの馬か」と言い、引きあ

げていったといわれています。

明治6（1873）年、雪斎は春嶽の像を制作しました。現在、木立神社（坂井市）に祀られている春嶽の像には、春嶽の領民への愛惜の情をうかがい知ることができ、エピソードが残っています。像は春嶽に奉呈されたのち、有志の願いで、太刀一振とともに桜谷神社（現在の三国神社）に贈られました。春嶽は、この像に添えられた立願文に、「自分が福井を治めていた時は、とかく領民を苦勞させた。自分の死後は魂だけでも越前へ帰り、領民の幸せをしつかり守りたい」と記しました。この立願文は、春嶽の治世を今に伝



三国神社木造神馬像

えています。

島雪斎をはじめ志摩派彫刻師の幕末の活躍。その足跡は、三国神社に残る彼らの作品や北陸三大祭に数えられる三国祭の山車などに施された美しい彫刻に見ることが出来ます。春嶽が寵愛した雪斎の魂と三国木彫の歴史は、今も三国に生きづいてい

関連史料・ゆかりの地

三国神社



くいのみこと 大山昨命と継体天皇をお祀りしている三国神社。重厚な随神門や拝殿の鳳凰、桐花、実物大の神馬像など、島雪斎をはじめとする志摩派の見事な彫刻が見られます。

【住所】坂井市三国町山王6丁目2-80（えちぜん鉄道三国神社駅より徒歩10分）

左内や由利を育てた

実践の儒学者、

吉田東篁



吉田東篁肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕 末維新期の福井藩は数多くの優秀な人材を輩出しました。藩教育の充実に力を尽くした儒学者、吉田東篁もその一人です。

東篁は、文化5（1808）年に福井藩の下級武士吉田隣紀の長男として、福井城下の桜の馬場で生まれました。幼名は金一、後に悌蔵と改めています。京都在住の儒学者である清田丹蔵の教えを受け、厳格な道徳主義と日常での実践を重視する崎門学（山崎闇斎を祖とする朱子学の一派）を修めました。その中で東篁は、学問とは実践を伴うものでなけ

年6月に藩校明道館を創設しました。明道館は「政道の基本」「士たる者の専務」を学ぶ文武教育の中心機関と位置づけられ、東篁はその助教役、訓導師として、自らの信念である実践の学を明道館で教授していきます。

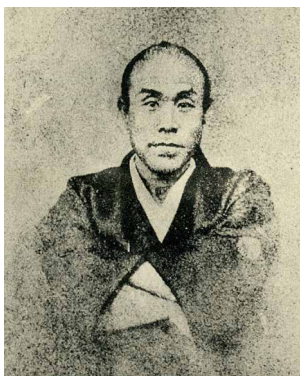
ればならないと考え、国のあり方や時事問題について積極的に発言していきます。

こうした東篁の姿勢に注目したのが、第16代福井藩主、松平春嶽でした。福井藩は天保3（1832）年に始まった学問所正義堂がわずか2年で閉鎖に追い込まれており、教育体制の確立が急務の課題となっていました。そこで、藩主を継いだ春嶽は新たな学問所の創設を企図し、東篁をその取調掛に任じました。東篁は同じく取調掛に任じられた平本平学らと協力し、安政2（1855）

福井藩を代表する儒学者へと成長した東篁は、藩外にもその名が知られるようになります。藤田東湖（水戸藩士）や梅田雲浜（小浜藩士）、梁川星巖（漢詩人）など、尊王攘夷論を唱えて一世を風靡した学者・志士たちと親交を深めました。また、春嶽の政治顧問として活躍する横井小楠（熊本藩士）とも交流し、小楠を福井藩に招へいする際にはその実現に尽力したのです。さらに、後進の育成にも熱心であり、東篁の下で学んだ鈴木主税や橋本左内などは、幕末期の福井藩政をリードし、由利公正や杉田定一などは明治期の国政でも活躍しました。



橋本左内肖像（福井市立郷土歴史博物館蔵）



由利公正肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

福井藩が進めた人材育成の方針には、東篁の実践に即して学ぶという強い信念が色濃く反映されています。この東篁の信念は、福井藩の人々が幕末明治の表舞台へ飛び出していく基礎になったのです。

関連史料・ゆかりの地

東篁先生之碑



足羽山の中にひっそりと建つ吉田東篁の石碑。明治8（1875）年5月2日に東篁が逝去したあと、門人たちが追慕のために建設しました。碑文には、学問は実践にあらざれば益なしと東篁が常に語っていたと記されています。

【住所】福井市足羽上町111周辺
(福井鉄道商工会議所前駅より徒歩 25分)

参考資料等

福田源三郎編『越前人物志』思文閣
『福井市史』通史編2近世 福井市

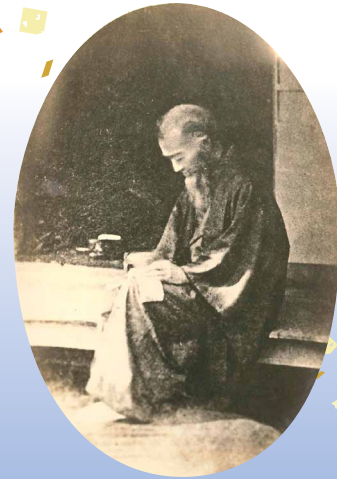
執筆・協力

福井市立郷土歴史博物館

幕政の手綱を

握った老中、

間部詮勝



間部詮勝肖像
(鯖江市まなべの館蔵)

鯖 江藩の第7代藩主であり、現在の西山公園を拓いた間部詮勝。詮勝は幕政にも深く関与しており、激動の時代の中心にいた人物です。

文化元(1804)年、鯖江藩5代藩主、間部詮熙の3男として誕生した詮勝は、文政6(1823)年に浜田藩主、松平康任の娘と結婚します。康任が老中に昇進すると、詮勝は奏者番(城中の礼式を管理する役職)に抜擢され、のちに寺社奉行・大坂城代・京都所司代と昇進を重ねました。京都所司代在職中には、辻

ごとに町名と通名を記した札をぶら下げて交通の利便性を向上させたほか、市中に便所を設けて衛生状態を改善するなど人々の生活に貢献しました。

天保11(1840)年、詮勝は、徳川家斉付の西丸老中に就任します。時の老中首座水野忠邦は、傾いた幕府財政を再建しようと天保の改革を断行しますが、大名から百姓に至るまでこれに反発。詮勝も改革に対して批判的で忠邦と対立し、藤岡屋由蔵の「藤岡屋日記」には「幕府政治に直接かわる役柄ではない詮勝が忠邦の不正や失策を内偵させて

いる」といううわさが書かれるほどでした。天保14(1843)年、忠邦は強権的な政治手法を非難されて老中を罷免、詮勝もまた病を理由に西丸老中を辞職し、両雄の対立は終結しました。

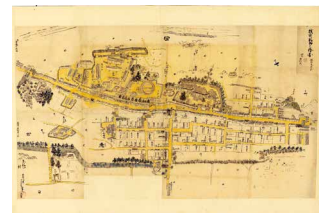
雌伏の時を過ごした詮勝が再び雄飛したのは15年後の安政5(1858)年です。大老井伊直弼の命で老中に再登用された詮勝は、「勝手掛兼外国御用掛」に任ぜられ、天皇の許可なく結ばれた日米修好通商条約の事後承諾を得る任務に当たります。この時、將軍継嗣問題も複雑に絡み合い、幕府を批判する勢力の声は激しさを増していったため、直弼は「安政の大獄」を断行しました。詮勝も「天下分け目のご奉公」と決死の覚悟で上洛し、勅許獲得に奔走しましたが、逮捕者に対する量刑や勅許の諸条件(天皇は国力が充実した後に鎖国の状態に戻すことを求めていた)をめぐる直弼と対立。翌年末に詮勝は老中を免職になり、直弼も安政7(1860)年3月に桜田門外で襲撃を受けて命を落とし、直弼と詮勝が主導した安政期の政権は瓦解しました。

詮勝はその後政治の表舞台に立つことはありませんでした。激動の時

代の中心にいた詮勝は、晩年は静かな暮らしの中で書画や詩歌の製作に精を出し、明治17(1884)年にその生涯を終えました。



伝間部詮勝所用
金黄櫛句絨具足
(鯖江市まなべの館蔵)



越前鯖江之絵図
(個人蔵)

関連史料・ゆかりの地

詮勝が拓いた 憩いの庭、西山公園



西山公園



歌川広重

「越前鯖江瀨陽溪真景」

安政3(1856)年に間部詮勝が「与衆道楽」の理念で拓いた瀨陽溪。後に北陸随一のツツジの名所西山公園となりました。開園以前は焰硝蔵が設置されており、詮勝の西の丸老中就任時には鯖江城の築城も計画されました。

【住所】鯖江市桜町3丁目(福井鉄道西山公園駅から徒歩3分)

参考資料等

内田寛『間部閣老』、鯖江市教育委員会文化課編『間部詮勝と幕末維新の軌跡』
鯖江市教育委員会文化課編『安政の大獄の真実-幕末史における再評価-』

執筆・協力

鯖江市教育委員会文化課

激動の京都で

活躍した

酒井忠義



幕 末の騒乱の舞台となり、混迷が深まっていた京都で幕府の代表である京都所司代として活躍したのが小浜藩主、酒井忠義です。

忠義は、文化10（1813）年に第10代小浜藩主、酒井忠進の子として生まれ、天保5（1834）年に家督を継ぎ、第12代小浜藩主となります。天保13（1842）年には寺社奉行を務め、翌年から嘉永3（1850）年まで京都所司代として、仁孝天皇の葬儀と孝明天皇の即位など天皇の代替わりの際の大役を果たします。

嘉永6（1853）年にペリーがアメリカ東インド艦隊を率いて浦賀

に来航すると、国内は尊王攘夷論・開国論など混乱を極めます。忠義は、安政5（1858）年に再び京都所司代として、大老井伊直弼の政治路線のもとに幕府の開国政策に反対する攘夷派を押しえ込むことになりま

す。実は、忠義は幕府と朝廷の関係破綻を防ぐことを大切に考え、厳しい弾圧には消極的だったといわれていますが、直弼の腹心・長野主膳に押し切られるように梅田雲浜を捕縛し、安政の大獄の扉を開いたのです。

しかし、桜田門外の変の後、失墜した幕府権威を回復し、朝廷と協力して外国に対処するため、公武合体政策を進めていきます。特に孝明天皇の信頼を得て、幕府と朝廷の仲を取り持ち、天皇の妹である和宮と



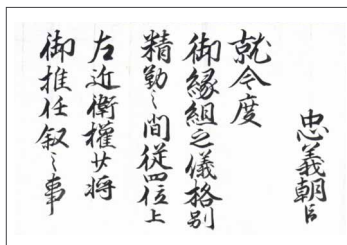
江戸へ降嫁する和宮の行列
(小浜市教育委員会蔵酒井家文庫)

將軍徳川家茂の婚姻、いわゆる和宮降嫁では中心的役割を担い、その功績は、朝廷と幕府の双方から認められました。しかし、忠義の評価は、安政の大獄で処罰された人々の復権により反転します。文久2（1862）年6月には京都所司代を罷免され、岩倉具視や千種有文らと策謀をめぐるせて和宮降嫁などの諸政策を進めたこととされて隠居・蟄居処分となります。

その後、鳥羽伏見の戦いでは小浜藩は幕府側として参戦し、朝廷から敵視されましたが、再び藩主となった忠義は、交友関係の深かった岩倉具視を通して誤解を解き、小浜を戦禍から守るとともに、新政府の北陸道鎮撫の先鋒を務めました。

幕末期、京都所司代であった忠義

は、幕府と朝廷の相反する立場に挟まれ、たいへん厳しい情勢の中で、藩祖酒井忠勝以来、守ってきた譜代藩主の立場と自身が担う京都所司代の職責を果たそうとしたのです。



酒井忠義従四位上左近衛権少将叙任指紙
(小浜市教育委員会蔵酒井家文庫)
公武合体、和宮降嫁に尽力した酒井忠義に与えられた官位叙位の書状



小浜城跡

関連史料・ゆかりの地

若狭小浜藩の居城である小浜城は、京極高次が築城を始め、寛永13（1636）年に酒井忠勝の時に完成しました。現在は本丸石垣しか残っていませんが、元々は三重の天守閣、本丸、二の丸御殿などの壮麗な城郭を構え、小浜湾に望む全国でも屈指の水城として知られています。

【住所】小浜市内1丁目（JR小浜駅より徒歩20分）

参考資料等

小浜市史編纂委員会編『小浜市史』通史編上・下 小浜市
小浜市教育委員会文化課編『幕末小浜藩・近代日本を創生した人々の思い』

執筆・協力

小浜市教育委員会文化課

幕末の志士の

さきがけ

梅田雲浜



梅田雲浜肖像（国立国会図書館蔵）

「大丈夫處世、應掃除天下」（立派な男子たるものは、世の間違った事をきれいに掃除するべきである。）と書にしたためた梅田雲浜。彼こそ幕末の志士のさきがけともいえる人物です。

梅田雲浜は、文化12（1815）年に小浜藩士矢部義比の子として小浜の城下町竹原で生まれました。8

梅田雲浜 二行書
「大丈夫處世、應掃除天下、豈事一室哉」（個人蔵）



歳から藩校順造館で崎門学派の勉学に励み、当時、江戸の藩校信尚館の教授で学名の高かった山口昔山に師事して才覚を現しました。その後、小浜に帰り、祖父方の梅田家を継いで梅田と名乗るようになりました。雲浜は、嘉永5（1852）年に藩に送った海防政策に関する意見書がもとで藩士の身分を剥奪されますが、諸国に遊説して回り、尊王攘夷論、国防政策の必要性を強く説き、新しい時代への変化を訴え続けました。雲浜は上方物産交易の組織化のため、現在の山口県萩を訪れており、

吉田松陰やその同志たちとの交流を深めています。その目的は情報交換を主眼としていたとする史料も残されています。なお、松陰の「松下村塾」の表札は雲浜の筆によるものといわれています。

尊王攘夷派志士のリーダーであった雲浜は、朝廷側の有力者である青蓮院宮の信頼を得て活動していました。安政5（1858）年8月7日に「戊午の密勅」が下されたという情報を入手した雲浜は、小浜藩士の坪内孫兵衛に宛ててその内容を知らせました。それは、「数日後には天下は大震動することになり、旧主である酒井忠義がそのまま井伊直弼と同調しては大変危うい立場になる。放逐された浪人の身分で言えるような立場ではないが、望郷の念を思っ知らせる」といったものでした。しかし、この思いは理解されることなく、小浜藩の家老から井伊直弼の腹心の長野主膳の手に渡ってしまいました。当時、京都所司代を務めていた忠義は、雲浜の捕縛には消極的でしたが、この手紙により雲浜と朝廷関係者の繋がりが決定的な証拠となったため、捕縛を決定せざるを得なくなりました。ここから安政の大獄が始まることとなるのです。

倉藩小笠原邸に幽囚されていました。安政6（1859）年9月14日に亡くなりました。この雲浜の最後の消息を知らせたと思われる手紙が残っています。それは、小浜藩江戸藩邸の成田作右衛門から忠義の腹心、三浦吉信に同年9月2日付で送られた手紙で、「雲浜が脚氣を患い、今日明日も持たないほどの深刻な病状である」ことが記されています。もちろんこの手紙の内容は忠義にも知らされたと考えられ、小浜藩における雲浜の存在の大きさを物語っています。

関連史料・ゆかりの地

梅田雲浜先生誕生の地



梅田雲浜先生誕生の地碑



小浜藩校旧正門 順造門
（現在の若狭高校正門）

梅田雲浜が誕生した千種は、小浜城下町の武家屋敷が並んでいた所です。昭和6（1931）年に矢部家の屋敷跡に石碑が建てられました。若狭高校には、藩校順造館の正門が移築されて、当時の趣を伝えています。

【住所】梅田雲浜先生誕生の地：小浜市千種2丁目（JR小浜駅より徒歩15分）
小浜藩校旧正門 順造門：小浜市千種1丁目（JR小浜駅より徒歩15分）

参考資料等

小浜市史編纂委員会編『小浜市史』通史編上 小浜市、梅田昌彦『梅田雲浜入門』ウイング出版部
小浜市教育委員会文化課編『幕末小浜藩・近代日本を創生した人々の思い-』

執筆・協力

小浜市教育委員会文化課

グリフィスが見た

明治維新とその中心人物、由利公正

フ イラデルフィア市生まれのアメリカ人、W. E. グリフィスは、明治4（1871）年3月、福井藩に、いわゆる「お雇い外国人」として赴任した人物です（当時28歳）。

グリフィスは福井藩の藩校、明新館の理化学教師として招かれました。グリフィスの日記や著作を紐解



グリフィス肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

くと、そこには「Mitsooka」という人物が登場します。三岡八郎、後の由利公正です。当時、日本の歴史や政治に関心があったグリフィスは何度も由利の家を訪ね、教育や政治のことを夜遅くまで話し合ったと日記に記しています。グリフィスは、横井小楠の西洋をポジティブに受け入れる思想を高く評価しており、その弟子、由利とも意気投合したといえます。若きグリフィスにとって、政治の中心で活躍した40代の由利は、新しい日本のビジョンを語り合える人物でした。また、由利にとっても、グリフィスは福井藩の殖産興業に必要な科学技術の教育者としてかけがえのない存

在でした。

グリフィスが赴任した3か月後、由利は福井藩の最高権力者となりま

す。そして、その翌月14日に、廃藩置県の命が下されると、政府から東京府知事に任命されます。

藩がなくなるという当時の日本の大変革を福井で体験したグリフィスは、その様子の一端を著作「皇国」にこう著しています。「…少数の乱暴者がまだ三岡（由利）ら天皇支持者を、こんなことになったのはお前達のせいだ、殺してやると言っている。けれども立派な武士や有力者たちは、異口同音に天皇の命令に賛成している。それは福井のためにはなく、国のために必要なことで、国情的変化と時代の要求だと言っている。日本の将来について意気揚々と語る者もいた。その学生は『これからの日本は、あなたの国（アメリカ合衆国）やイギリスのような国の仲間入りができる』と言った。」



由利公正肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

由利が東京府知事として上京すると、明新館の優秀な教師はその多くが福井を後にします。グリフィスも福井を離れ、東京大学で教鞭をとった後、31歳でアメリカに帰国します。日本での体験で歴史研究に魅せられたグリフィスは、帰国後、間もなく「皇国」を著し、日米で高い評価を得ました。

激動の明治維新を生きた武士たちと巡り合い、廃藩置県という時代の変わり目を福井で体験したグリフィス。「皇国」で「Mitsooka」は「国家の進歩の中心人物であった。」と描かれています。

関連史料・ゆかりの地

グリフィス記念館



福井初の洋風建築であったグリフィス邸。往時の雰囲気をそのままに再現しています。館内では、グリフィスの功績を中心に、由利公正や日下部太郎など幕末から明治に活躍した先人たちを紹介しています。

【住所】福井市中央3-5-4 (JR 福井駅より徒歩12分)

参考資料等

「W.E. グリフィスと由利公正（三岡八郎）」グリフィス記念館
三上一夫・舟澤茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社

アメリカで散った

若い命が日米の 国際交流の懸け橋に



日下部太郎肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

ラテン語の教師として、また、友人として太郎を支えます。グリフィスは、太郎の真剣に授業に臨む姿勢と真面目な人柄に尊敬の念を抱き、私には、彼に心密かに敬意を払い、深く日本の国風を憧れるにいたった」と述べています。

明治3(1870)年、太郎は卒業を前にして26歳の短い生涯を閉じますが、その年、グリフィスは福井藩から藩校明新館の講師として招かれます。招待状を受け取ったグリフィスは、悩んだ末に太郎の面影を思い浮かべ、「私の学んだ自然科学の知識や技術が、その国や国の人たちのために役立つなら、こんなに嬉しいことはない」と、福井行きを決意します。来日したグリフィスは、

明新館で英語や物理、化学などを教えたほか、日本における当時最新の理科実験室を作りました。熱心で優しいグリフィスの人柄は、福井の人々に伝わり、慕われていたといえます。

太郎の死後、約100年後の昭和49(1974)年には、郷土史を勉強していた福井青年会議所のメンバーがラトガース大学に資料収集に訪れています。これらを契機に、昭和56(1981)年にラトガース大

関連史料・ゆかりの地

学と福井大学が姉妹大学に、昭和57(1982)年にニューブランズウィック市と福井市が姉妹都市に、平成2年にニュージャージー州と福井県が姉妹州県になっています。現在も、学生の相互派遣など、文化・教育面で交流が行われています。日下部太郎の高い志は、グリフィスの心を動かし、2つの地域をつなぐ懸け橋となったのです。

足羽河畔に臨む

日下部太郎とグリフィスの像



福井市中心部を流れる足羽川を眺めて静かに佇む日下部太郎とグリフィスの師弟像。福井市とニューブランズウィック市の姉妹都市提携20年を機に設置されました。二人の功績は、両地域の交流を深め、多くの人の記憶の中に留められています。

【住所】福井市中央3丁目幸橋北詰(JR福井駅より徒歩10分)

開国を機に西洋の芸術・技術の導入が急務となった幕末。その時代に福井藩で初めて海外留学した青年が日下部太郎です。

日下部太郎は、弘化2(1845)年、福井城下に生まれました。勉強熱心な太郎は、通常なら15歳で入学する藩校「明道館」に13歳で入学。その後、21歳で長崎に遊学した後、慶応2(1866)年4月、留学を強く願ひ出ます。福井藩は、最初の藩費海外留学生として太郎をアメリカに渡航させることを決定しました。



留学中の日下部太郎(右)
(Rutgers Univ. Griffis Collection)

慶応3(1867)年、太郎はニュージャージー州ニューブランズウィック市のラトガース大学で、W・E・グリフィス(後に、著書「皇国」でアメリカに日本を紹介)に出会います。2歳年上のグリフィスは、

幕末の悲劇

水戸天狗党事件（前編）

小藩、大野藩の窮余の一策

由 利公正が挙藩上洛計画の責めを受け、藩から幽閉蟄居の処分を受けていた元治元（1864）年、福井では全国を揺るがした大事件がクライマックスを迎えます。いわゆる水戸天狗党事件です。

幕末の水戸藩では、藩の実権を巡り保守派と尊王攘夷を強硬に主張し藩政をリードしようとする改革派（天狗党）に分かれ、激しく対立していました。

松平春嶽は、明治になって記した回顧録「逸事史補」の中で、「この両党（派）の争いの起源は、実は水戸斉昭卿の大失策である。大不徳である。」として、対立の責任は水戸藩主であった徳川斉昭にあったと

記しています。改革派を重用し、ことさら保守派を退けたため、保守派が天狗党に対する憎悪を深めたというものです。

両派の対立が深刻化する中、元治元年3月、天狗党の首領格、藤田小四郎（尊王攘夷思想に影響を与えた水戸藩士藤田東湖の子）が、保守派の一掃と横浜鎖港を実現しようと筑波山で挙兵しました。

この時は鎮圧されましたが、天狗党一行は、同年11月1日、改革派の重臣、武田耕雲斎を将に立てて再び挙兵。斉昭の七男であり、当時、横浜鎖港を主張していた禁裏御守衛総督、一橋慶喜を頼って西上を開始します。幕府は一行を「浮浪之徒」とし、諸藩に追討令を発したため、

先々で行く手を阻まれましたが、行路を変更しながら西上を続けます。その途中、美濃国で進路を北に変え、12月4日、蠅帽子峠を越えて越前国に入ったのです。

領内に天狗党を迎えた大野藩は、軍事惣督内山隆佐を亡くしたばかりの時期で、藩主、土井利恒も江戸在役中であつたため、重臣が合議、対応を図ります。天狗党が速やかに領内を通過するよう、大野藩は、一行が通行する道筋に当たる5村200軒を超える民家を焼き払うという焼



「水戸天狗党の西上行程」（『図説 福井県史』より）

土作戦を取ります。（一部の村の焼打ちは手違いで天狗党の通過後に行われ、村人の怒りを買いました。）当時、福井の諸藩は、幕府の命で第一次長州征伐や京都の警護に多数の兵を出しており、大野藩が割ける戦力はわずか200人程度しかありませんでした。焼打ちは、戦わずして千人近い天狗党を領内から追い払おうとする小藩、大野藩が取った窮余の一策でしたが、この策で多くの民衆が家を失ったのです。（後編に続く）

関連史料・ゆかりの地

越前大野城



織田信長の部隊将金森長近が築城した越前大野城は、天正4（1576）年から4年の歳月を要して完成しました。その後、大野藩主、土井氏の居城となります。現在の城は、昭和43（1968）年に再建されたもので、近年は雲海に浮かぶ“天空の城”としても人気を集めています。

【住所】大野市城町3-109（JR越前大野駅より天守閣まで徒歩約40分）

幕末の悲劇

水戸天狗党事件（後編）

（非情な処分の裏に慶喜の悲痛な思い有り）

橋慶喜が天狗党追討軍の総大

将となったことから事態はク

ライマックスを迎えます。当時、慶

喜は禁裏御守衛総督という京都を警

護する役職についており、天狗党が

京に近づけば討伐せざるをえない立

場になりました。

この時、福井藩を含む諸藩は第一

次長州征伐に多数の兵を割っていた

ことから（福井藩主、松平茂昭は副

総督として藩兵3千7百人を率いて

豊前に出陣中）、慶喜は加賀藩、会

津藩、桑名藩の兵4千人を従えて討

伐に向かいます。中でも主力となっ

たのが加賀藩で、敦賀の葉原に陣を

敷き、天狗党と対峙。その交渉窓口

となり、同藩の軍監（軍の責任者）

永原甚七郎が武田耕雲斎と交渉を

行っています。

一方、福井藩の家老で府中（武生）

城主、本多副元、鯖江藩主、間部

詮道は、天狗党殲滅の方針を固め、



「水戸天狗党の福井県内行程」（『図説 福井県史』より）

自領に通じる峠を嚴重に封鎖し、天狗党が敦賀方面に進路を変更するとそのまま追撃に入りました。当時の福井藩には、安政の大獄で春嶽が隠居に追い込まれるなどしたため、幕命を実直に守ろうとする意向が強くなる一方で、親交の深かった水戸藩の家臣が起こした事件であり、積極的に動けないといったジレンマを抱えていました。

頼みの綱の慶喜が天狗党追討軍の総大将であることがわかり、包囲の環が迫って行く手もふさがれたため、追討軍による総攻撃直前の12月11日、天狗党一行823名はやむなく敦賀の新保で降伏しました。初め加賀藩に預けられ、丁重な扱いを受けましたが、幕府に引き渡された後は、肥料となる鯨粕を貯蔵する蔵16棟に送られ、罪人の扱いを受けました。その内353名は形式的な取り調べを受けて斬罪となり、慶応元年（1865）年2月、敦賀市松島町の来迎寺境内で刑に処せられました。残る約470名も遠島・追放・水戸渡し・寺預け・江戸送りとなり、水戸で始まった天狗党の乱は、敦賀で終息したのです。

松平春嶽は、動くに動けなかった福井藩に代わり活躍した加賀藩の働

きに感謝し、慶応元年（1865）年正月3日、使いを金沢に送り謝辞を述べています。また明治に入り、自らの回顧録「逸事史補」の中で、慶喜が天狗党に対し、かつての部下ながら厳しい処置を取ったことについて、「武田らは…ああかわいそうであった。」慶喜公が（私に）言われるのは、「私も春嶽さんであったならば寛大な処分ができて、（彼らは）禁錮くらいで済んだらうが、実に気の毒であったことしきりである。」と、前水戸藩主徳川斉昭の子であったが故に、厳しく接しなければならなかった背景を説明しています。

関連史料・ゆかりの地

ニシン蔵 （水戸烈士記念館）



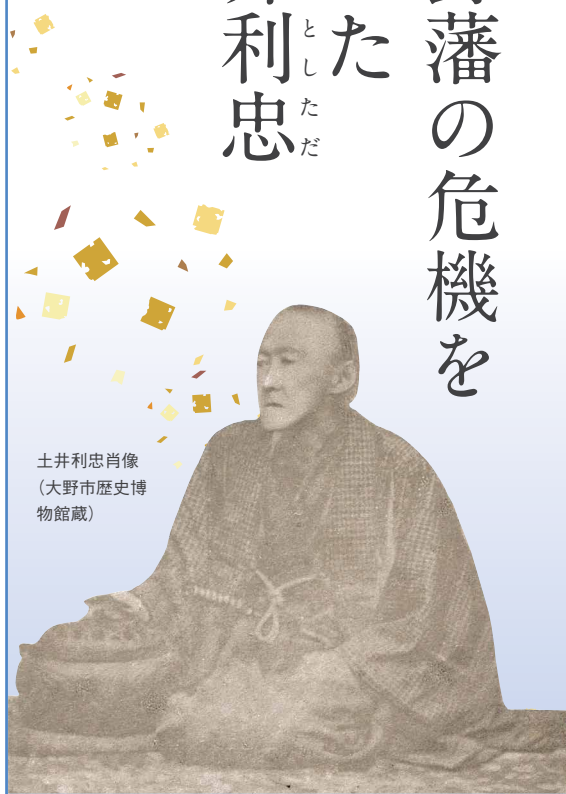
天狗党浪士が収容されたニシン蔵16棟のうち、1棟が松原神社境内に移築されました。現在は水戸烈士記念館として使用されています。松原神社は彼らを祭神として祀った神社です。境内の梅の木は浪士たちにちなんで水戸から献木された偕楽園の梅です。この縁で敦賀市と水戸市は姉妹都市になっています。

【住所】敦賀市松原町2 松原神社内（敦賀ICより車で約13分）

大野藩の危機を

救った

どいとしただ 土井利忠



土井利忠肖像
(大野市歴史博物館蔵)

幕 末大野藩の名君として知られる土井利忠。大野藩土井家7代目の藩主であり、倭約や地場産業奨励などにより大野藩の財政再建を図ったほか、人材登用、藩校明倫館や洋学館の設置、軍制改革、洋式帆船の「大野丸」の建造、サハリン開拓などを行った人物でした。

利忠が藩主となった頃は、藩は莫大な借金を抱えており、天保4(1833)年には9万6千両の借金がありました。1両を10万円で計算すると96億円にもなります。当時の大野藩の全収納高が1万6千両に

も係わらず借金の利息は年9千両といわれており、収入の半分以上が利息に消えていく状態だったのです。利忠はこの状況を打開するため、天保13(1842)年に「更始の令」を出し、藩政改革に乗り出します。その内容の一部は次のとおりです。

「君臣上下は一体である、お前たち家臣があるから自分も大名たりえ、土井家が続くからお前たちもやっていけるのである、この所を深く理解してほしい。財政難から政務が欠け、不正も生じ、正直者が埋もれているようでもある。政治向きはもちろん私自身の身の処し方に至る

まで、気付いたことは何でも申し出てほしい。他見他聞を憚ると思えば封書で差し出してもいいし、直接言いたいことがあれば小姓頭まで申し出れば何時でも会って話を聞こう。お前たち家臣の「真忠の精力」に頼る以外土井家にも大野藩にも未来はないのだ、一同の者、くれぐれも頼んだぞ。」

この「更始の令」は、利忠自ら生活を切り詰めて借金を返し、藩の財政を立て直そうという決意を表したものです。この令の読み上げを聞いた藩士一同は、利忠の思いを受け感動の涙を流したと伝わっています。

これを機に、藩主自ら節制に努めたほか、前出のとおり次々と先進的な政策を行っていきました。改革は成果を上げ、洋式帆船の大野丸を建造できるほどの財政再建を成し遂げます。大野藩をもう一度やり直す(更に始める)という気概で取り組んだ試みが見事に実を結んだのです。

利忠は明治元(1868)年に58歳で亡くなりました。大野城のふもとには、その遺徳を偲び、利忠を祀る「柳廼社」が建立されています。大野を救った名君として今も人々に顕彰されているのです。



土井利忠をまつる「柳廼社」

関連史料・ゆかりの地

大野市歴史博物館



昭和61(1986)年に「大野市歴史民俗資料館」として設立され、大野市の縄文時代から近代までの歴史資料を収集・保存・展示しています。白山信仰や中世の仏教、岩佐又兵衛(いわさまたへえ)絵画の資料とともに、大野藩土井家7代藩主、土井利忠以降の藩政資料を多く展示しています。

【住所】大野市天神町2-4 (JR越前大野駅より徒歩10分)

参考資料等

大野市教育委員会ほか編『大野のあゆみ改訂版』大野市、大野市史編さん委員会編『大野市史』史料総括編 大野市、大野郡教育会編『福井県大野郡誌』下編 河原哲郎『歴史と史跡大野』大野市、『図説福井県史』福井県、坂田玉子『越前大野・今はむかしのものがたり』

執筆・協力

大野市商工観光振興課

新領地を求めた

大野藩の挑戦

蝦夷地開拓と大野丸

幕末に大野藩が藩の命運をかけて取り組んだ事業、それが蝦夷地開拓と洋式帆船「大野丸」の建造です。



内山隆佐肖像
(大野市歴史博物館蔵)



内山良休肖像
(大野市歴史博物館蔵)

当時、大野藩は全国の諸藩同様、莫大な借財に苦しんでおり、藩主、土井利忠は、内山良休と隆佐の兄弟を抜擢し、改革に当たらせました。兄、良休は主に銅山などの産物や財政を受け持ち、弟の隆佐は蝦夷地開拓を任せられました。良休は、安政2（1855）年に、藩直営の商店、大坂大野屋を開設。その後、これを全国に広げ、着実に財政再建を進めていきます。一方、隆佐は、同年冬の幕府の蝦夷地開拓奨励を受け、良休らとともに利忠に応募を進言。4万石の大野藩が、新しい領地を得るための新事業に乗り出したのです。安政3（1856）年、隆佐は30余名からなる探検隊を率いて現地に行き、調査。開拓の人員・

資材、交易品運搬のため、外洋を航行できる洋式帆船が必要との結論に至ります。隆佐は、幕府の許可を得て船の建造に着手し、安政6（1859）年3月に敦賀・箱館間を初航海しました。当時、洋式船の建造は全国的にほとんど例がなく、大藩でもできないことを小藩が成し遂げたと「出群の所置（群を抜いている）」と称されました。名前は、利忠が「大野丸」と命名。製造費用は、蝦夷口掛硯日払帳によれば、7,239両（現在のお金で約2億円）で、大野屋の売上金から支払われたといえます。隆佐の蝦夷地開拓の戦略をうかがい知れるエピソードが残っています。隆佐は、今年はともかく来年からは「損失」が出ることはなく、大野屋と大野丸・奥地開拓がうまく噛み合えば、結局「大利」を得る」と見通していました（内山隆佐書状）。安政3（1856）年に箱館大野屋を開設し、翌々年、北蝦夷西海岸の開拓が許可されたことで、交易と開拓の両輪で事業を進めていくことになりました。開拓の収支はトントンだったといわれていますが、隆佐が見通したとおり、箱館大野屋での交易は、明治6（1873）年までの17年間で約2万両の利潤を上げました。大野丸は、大野産の米やたばこのほか、

反物・和紙・漆器などを蝦夷地に運び、地場産業の育成にも貢献したのです。万延元（1860）年、ついに、北蝦夷西海岸が大野藩準領地となります。その4年後、隆佐は病気で亡くなりますが、開拓は明治2（1869）年まで継続されました。日露戦争後から第二次世界大戦までの間、日本の領土だった樺太。大野藩の人々が苦心した足跡は、当時、樺太庁により鶴城史蹟として指定され、しっかりと樺太に刻まれていたということです。

関連史料・ゆかりの地

武家屋敷 内山家



大野藩の財政再建に尽力した内山兄弟。二人の偉業を偲ぶため、後の内山家の屋敷を解体復元し保存した建物です。庭園を眺めながら、お茶が楽しめます。

【住所】大野市城町10-7（JR越前大野駅から徒歩15分）

勝山の

近代産業の父、

林毛川



林毛川肖像
(山田秋甫『林毛川』より)

幕 末明治期に発展した勝山煙草や繊維を伝統産業に導き、また、藩校を設立し人材育成に努めるなど、勝山繁栄の礎を築いた人物が林毛川です。

毛川（字は季梁、通称を芥蔵）は代々小笠原藩の家老職を勤める林家の三男として、享和元（1801）年に生まれました。毛川の名は「毛谷川＝定川」に由来します。「川に心は無いが昼夜休むことなく流れ田畑を潤し、領民に恵を与え世の中の役に立つ。自分は川の水にも及ばない人間であってはならない、何としても人の役立つ人間になろう」。彼

改会所」が設けられ、製糸にも力が注がれます。こうして、勝山の伝統産業である煙草・繊維産業への道が拓かれたのです。

第二は藩校を設立し、人材を育成したことです。天保14（1843）年、藩医、秦魯齋の建言に基づき、藩校成器堂を創設。その特色の一つは、小笠原礼法を伝える藩として習礼を学ばせたこと、二つ目は医学教育を取り入れたことです。文久3（1863）年、魯齋の三男、朴三郎は、オランダ軍医ポンペの「朋氏解体書」を筆写し「成器堂文庫」に加えています。

なお、成器堂は、後に福井県の繊維産業を牽引する人物を多数輩出します。明治5（1872）年には、成器堂出身の齋藤遊絲、小林平三郎が富岡製糸場に工女を派遣し、県内で先駆けて「勝山製糸会社」の設立に尽力しています。

は20歳頃から約7年、江戸の昌平坂学問所で学び、頼山陽など一流の学者と親交を深め、その経験を藩政改革に活かします。毛川は自著「時務拙論附改革要務」に基づき、天保11（1840）年から藩主、小笠原長守のもとで藩政改革を始めました。

その改革は多岐に及びましたが、その第一は煙草の藩専売を実施したことです。高品質の勝山産煙草に目をつけ、嘉永6（1853）年、「煙草改会所」を設け領外への輸送・販売を行いました。路線は引き継がれ、安政4（1857）年には「諸産物

明治24（1891）年に孫たちが出版した「毛川遺稿」では、毛川の人柄を次のように評しています。「歴史に詳しく文章は力強い、性格は剛直で人におもねることは無い、議論は徹底して行いが終わると何のこだわりも残さない」。また、安政2（1855）年に書かれた「春日偶成」には、毛川の遺言ともいえる「壯

士忠魂死不滅」の言葉が残されています。毛川の残した功績から、大正13（1924）年には、正五位を贈位されました。

現在、市内には成器堂の遺構として講堂など3つが残っており、毛川の功績を今に伝えています。



旧成器堂講堂（神明神社社務所）

関連史料・ゆかりの地

林季梁遺徳碑



碑文 627 文字から成るこの碑は明治22（1889）年に建てられました。文は日本最初の文学博士である重野安繹によるものです。そこには成器堂の成立事情など藩政改革の経緯、毛川の人間性も含めた人物像などが記されています。

【住所】勝山市元町1丁目勝山市民会館前（えちぜん鉄道勝山駅より徒歩13分）

参考資料等

林毛川『時務拙論附改革要務』、林毛川『上書草稿』、安田仁一郎『勝山藩古事記』新東京社、林毛川『毛川遺稿』林鶴太 他

執筆・協力

勝山市教育委員会

河野浦が生んだ偉才、

9代目

右近権左衛門



九代目右近権左衛門肖像（右近家蔵）

幕 末明治期、河野浦（現在の南条郡南越前町）に生まれ日本の海運に新時代を築いた男がいます。男の名は9代目右近権左衛門（権太郎・廣隆）。彼は、その経営手



八幡丸船模型（右近家蔵）

腕により、後に、日本海有数の北前船主として名を残すこととなります。

河野浦は越前海岸の南端、敦賀湾のほぼ入口に位置します。平地が少なく、山と海の間が密集する集落で、古くから海運の浦として府中（現在の越前市）と敦賀を結ぶ海陸の中継地の役割を担っていました。

代々この地に住んでいた右近家は、17世紀後期ごろから海運業を営み、7代目、8代目の頃に、「買い積み」商い（各地で買い入れた商品を利益の出る港に運び高く売る商

売）に乗り出します。そして幕末明治期にこの「買い積み」商いを大きく発展させたのが9代目権左衛門なのです。

彼は、文化13（1816）年、河野浦で生まれ、17歳で船頭となり、廻船を率いる知識や技術を会得します。彼は従来から右近家が所有していた廻船に加え、大坂の間屋商人和泉屋や近江屋と廻船の共同経営を行います。情報収集に長けていた彼は、幕末に急拡大した蝦夷地・大坂間の魚肥の価格差を利用し、利益を急増させます。文化年間（1804～1818）、2、3艘だった持船は幕末には11艘を所有するまでになり、利益は1万2千両（現在の価値で12億円）に達しました。彼の経営手腕により、右近家は日本海有数の北前船主となったのです。

彼は廻船経営で得た利益を地域の社会インフラ整備に充てます。明治初年、中村三之丞（卯の助、9代目権左衛門の弟）とともに、多くの私財を投じ、武生から春日野を経て河野浦に至る「春日野新道」を開削します。この新道開削には多くの地域住民を雇用しており、廻船経営で得た利益を地域に還元したのです。

明治21（1888）年、9代目権左衛門は72年の生涯を終えます。没

後の明治25（1892）年、経営拠点とした大阪の一心寺（大阪府大阪市）に顕彰碑が建立されました。顕彰碑には親交のあった150名余りの名が刻まれており、多くの人々から敬愛を集めていたことがうかがえます。

関連史料・ゆかりの地

北前船主の館右近家（右近家住宅）



北前船主の館右近家（右近家住宅）



西洋館

右近家住宅は、10代目権左衛門が明治34（1901）年に拡充して建てた本宅や土蔵、本宅背後の高台にある西洋館や日本海に向けて構える長屋門等から構成されています。本宅や土蔵は路地（河野北前船主通り）の両側に立ち並び、河野特有の町並みをつくりだしています。12代目権左衛門が本宅の管理を旧河野村に委ねたのを機に、平成2年から北前船主の館右近家として、建物の公開と資料展示を行っています。

【住所】南条郡南越前町河野 2-15（JR 武生駅より福鉄バスで約30分「河野」下車すぐ）

参考資料等

千葉亮『9代目右近権左衛門一記 萬両往来』南越前町、河野村産業観光課編『北前船主の館 右近家（総合案内）』日本福祉大学知多半島総合研究所編『越前国南条郡河野浦・右近権左衛門文書目録』河野村

執筆・協力

南越前町観光まちづくり課 学芸員 稲吉 昭彦

生涯敵対し合う

犬猿の仲、

関義臣と由利公正

関 義臣（旧名・山本龍二郎）は、天保10（1839）年、福井藩の家老である本多家家臣の次男として、府中（現在の越前市）に生まれました。藩校明道館に学び、同館幹事橋本左内に認められて幹事局手伝いとなります。その後、諸国巡学を経て、昌平坂学問所に入學。在學中の元治元（1864）年には、国事探索方（藩外での情報収集等を担当）に就きました。しかし、幕政返上論を主張する関と公武合体を目指す福井藩との間には大きな隔たりがあり、関は藩を離れます。

慶応2（1866）年、長崎に坂本龍馬を訪ね、亀山社中（後の海援隊）に加わりました。そして、翌年には、龍馬や後藤象二郎と協議し

て大政奉還の建白書の草案を作成しています。

関の性格は、素朴でへつらうことが嫌いな直情型で、頑固な気質でした。そして、生涯を通し、同じ福井藩の由利公正と激しく対立したことで知られています。二人は横井小楠門下で机を並べた学友でしたが、異常に反目しあいます。

文久3（1863）年、関は、小楠や由利が計画した挙藩上洛計画を阻止しようと動きまわります。これは、福井藩が孤立することを危惧して起こした行動でしたが、小楠・由利からは反発と捉えられます。

明治元（1868）年には、京都・岡崎の福井藩邸に滞在していた関が

徳川氏が倒れ、真の王政維新に遭遇でき、こんな愉快なことはないと口を滑らせます。同席していた由利は大いに憤慨し、関を入獄させるか切腹させるべきだと主張するほどでした。

対立はさらに続きました。大阪府知事を務めていた後藤の要請で大阪府の営繕局等を取り仕切りましたが、明治2（1869）年、福井藩と関わりの深かった清水磯吉を捕縛したことにより由利との関係は決定的となります。福井藩は大阪府に対し、執拗に関の解任を要請。それに応えないと見るや、関の拉致および強制帰藩、そして府中の関の兄宅への幽閉にまで対応をエスカレートさせます。さらに、明治3（1870）年には、主家本多家の華族加列問題に端を発した武生騒動に関が関与したとして捕縛し、死罪にしようとしています。その主導者は由利だったのです。

死罪を免れた関は、その後、大審院検事や徳島県知事、山形県知事、貴族院勅撰議員などを歴任。明治40



関義臣肖像
（『明治肖像録』より）

（1907）年9月には、男爵の爵位を授けられています。関は、由利の政敵大隈重信とも親しかったこともあり、その後の明治新政府においても由利との敵対関係は続いたのです。

関の死後、遺族により武生図書館に寄贈された蔵書の中に芳賀八彌『由利公正』があります。本書には関の直筆で「由利ノ虚誕虚喝ノ多キ人ヲ欺キ世ヲ欺キ後ヲ欺ク・・・」と記された付箋が貼られており、生涯敵対した二人の関係を今に伝えています。

関連史料・ゆかりの地

明道館（明新館）跡



松平春嶽が将来の有望な人材を育成するために設けた藩校、明道館。その跡地には今ひっそりと石碑が建っています。由利公正、関義臣、日下部太郎（福井藩最初の海外留学生）らを輩出。維新後は「明新館」に名称変更されました。

【住所】福井市大手3-4-1（放送会館東北角）（JR福井駅より徒歩5分）

知識と技術と実践で

若狭の農を支えた 伊藤正作



伊藤正作肖像
(伊藤宗兵衛家蔵)

「はたらくのものにもむだほねおるぞ苗のそたての徳しらにや」など農耕のいろはを歌に詠んだ「耕作いろは歌」。これは若狭の農の発展に寄与した伊藤正作によるものです。

正作(本名信前)は、安永8(1779)年4月7日、三方郡河原市村(現在の三方郡美浜町河原市)の伊藤宗兵衛家の嫡男として生を受けました。伊藤家は、曾祖父信利の時代から、医者と農業を家業としていました。父信安は家業の他、河原市村の庄屋を務め、和歌・俳句に優れた歌人でもありました。こう

した環境下で育った正作は、寛政12(1800)年に46才で急逝した父の跡を継ぎ、数え年26才で河原市村の庄屋となります。当時の河原市村は、戸数40戸ぐらい、田畑634石(約1600俵)余りで、小浜藩の中で大きい村でした。

正作は、『農業全書』など当時刊行の農業書のことごとく読破・研究し、広く藩外の農業実践家を尋ね歩いて見聞します。そうして得た農業技術をもとに、自らの実践と重ね合わせて実証し、若狭地方の気候風土に合うように手法を考案、普及に努

めたのです。

正作の手がけた農業技術改良のつに、稲の作付けがあります。正作が生まれた頃の稲の作付けは、中稲、晩稲が中心で、天候不順等による大打撃を受けていました。しかし、河原市村では、正作が実践実証した早稲の作付けに重点を移し、裏作に麦や換金作物である菜種などの雑穀類を作付けするようにし、飢饉を乗り越えたのです。

小浜藩主は、こうした実践家としての正作の働きに注目し、各村々の農業指導を要請。正作はその功により、文化6(1809)年に、侍と同様に帯刀の特権を付与されましたが、それを固辞返上し一百姓として村人とともに過ごすことを選んだと伝わっています。

天保10(1839)年、正作はこれまでの実践実証をもとにした『農業蒙訓』を出版します。また、これ

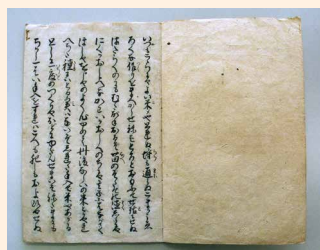


『農業蒙訓』(伊藤宗兵衛家蔵)

に先立ち、天保8(1837)年には、父親習いの和歌や俳句の形式を模して、『一粒萬倍耕作早指南種稽歌』と『耕作いろはうた』を編み出します。ここには、当時の飢饉を乗り越えた様子が綴られています。彼はその生涯を農業の発展のために捧げ、元治元(1864)年86才で逝去しました。

関連史料・ゆかりの地

『耕作いろは歌』と
小浜藩から賜った紋付



『耕作いろは歌』(野崎左衛門家蔵)



小浜藩から賜った紋付
(伊藤宗兵衛家蔵)

『耕作いろは歌』は都々逸形式からなり、方言を織り交ぜながら「いろは48文字」の歌い出しで、農民にわかりやすく語りかけている農業書です。また、伊藤正作は小浜藩から功績を認められ、帯刀の特権を与えられましたが、「農業に刀はいらぬ。」と固辞し、その時に「紋付・袴・脇差」を賜りました。

上野丹山、

知られざる偉業

—坂東本『教行信証』の臨写—



木造丹山坐像（浄勝寺蔵）

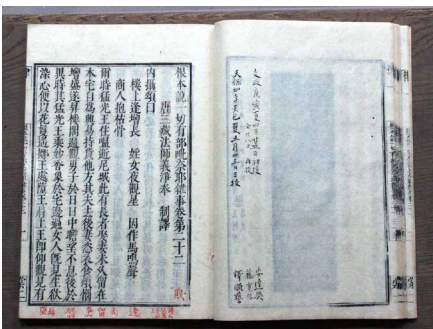
浄 勝寺（丹生郡越前町下糸生）第13世住職であった上野順藝は「丹山」の雅号で知られる幕末を代表する学僧です。丹山は、当時流布していた『黄檗版一切経』に誤りが多いことを嘆き、京都建仁寺に所蔵されていた『高麗版大蔵経』と照らし合わせ、經典の本来の姿を追究しました。浄勝寺所蔵『黄檗版一切経』は丹山の筆によって『高麗版大蔵経』の内容が記された貴重な資料で、福井県指定文化財となっています。

この他にも、あまり知られてい

ない丹山の業績があります。坂東本『教行信証』を臨写したことで、『教行信証』は親鸞の著作であり、正式の名を『顕浄土真実教行証文類』といいます。「教・行・信・証・真仏土・化身土」の6巻からなり、『無量寿経』における阿弥陀仏の願文を根拠にして、經典や祖師の文章を引用しながら私釈を加えています。東本願寺に所蔵される『教行信証』は親鸞の真筆で、もとは東京上野の坂東報恩寺に伝来したものであることから、とくに「坂東本」と呼ばれ、国宝に指定されています。この坂東本『教行信証』は大正12

（1923）年の関東大震災で被災し、平成15年より本格的に復元事業が開始されました。その際に、かつて丹山が臨写した『教行信証』が底本として重要な役割を果たしたのです。臨写本を所蔵する大谷大学図書館には、次のようなエピソードが伝わっています。

「坂東本は」朱の色が褪せて、極めて淡くなっている部分があり、全く見えなくなっている部分もあるのである。ところが、幸いなことに、江戸時代の後期、今から約145年前に、極めて綿密に忠実に坂東本を臨写した本が、大谷大学図書館にある。学内では、早くから、この本を丹山本教行信証と呼んで、非常に大切にしている。（大谷大学図書館「貴重特別図書目録」には「坂東本丹山影写」として出ている。実は私、20数年前、名畑（応順）博士の後を受



校合『黄檗版一切経』（浄勝寺蔵）

けて図書館長に任命せられた時、若し、火災というような時には、第一にこの本を取出さねばならぬと言われたことであつた。」（多屋頼俊「坂東本の朱筆」『増補 親鸞聖人真蹟集成』第2巻 法蔵館）

坂東本『教行信証』の臨写は、浄土真宗の教義を今に伝える重要なものとして、現代の研究者から大きな評価を得ています。

関連史料・ゆかりの地

浄勝寺と一切経蔵



上野山 浄勝寺



一切経蔵

浄勝寺は真宗大谷派に属す寺院です。慶長15（1610）年、本願寺教如から寺号を下付されました。境内背後の丘陵中腹には一切経蔵が建ち、『黄檗版一切経』をはじめ、丹山が収集した典籍や数多くの文化財が納められています。

【住所】上野山浄勝寺：丹生郡越前町下糸生101-1（JR福井駅より京福バス清水グリーンライン線で約1時間下糸生）下車徒歩5分）

参考資料等

越前町教育委員会編『丹山 幕末を生きた学僧』、越前町教育委員会編『平成30年度 越前町織田文化歴史館 幕末明治福井150年博 特別展示リーフレット 幕末明治の越前町』多屋頼俊「坂東本の朱筆」『増補 親鸞聖人真蹟集成』第2巻 法蔵館、山田秋甫『浄勝寺丹山』丹山文庫

執筆・協力

越前町織田文化歴史館 学芸員 村上 雅紀

幕末に曹洞宗の 宗権確立に挺身した 臥雲禪師



臥雲禪師肖像（玄勝院蔵）

近代社会への変革を目指した幕末明治期。この大変革期に23年にわたり大本山永平寺の舵を取った人物が臥雲禪師です。

臥雲禪師は、寛政2（1790）年、薩摩国（鹿児島県）日置郡に弓削家の八男として生まれました。14歳で出家し、19歳の時、薩摩を旅立ち、相模国東照寺等で修行した後、天保6（1835）年、江戸大円寺の住職に抜擢されます。そして、嘉永元（1848）年、越前永平寺60世住職に就き、永平寺を取り仕切るに至りました。

臥雲禪師は、薩摩と切り離せない縁があったといえます。禪師に長年寄り添い副寺として支えた高弟、大辻是山は薩摩出身でした。また、西郷隆盛、大久保利通と親交があり、永平寺住山の後も、上洛の際は京都の天寧寺において交際してました。特に西郷は永平寺にも来ており、禪師は常に彼を「吉之助」と呼ぶ親しい関係だったと言います。さらに、禪師は、江戸に出席した際には常に島津家を訪ねており、島津斉彬が有事の際は、臥雲、是山を使うべしと語るなど、大変信任が厚かったと言われています（『西郷隆盛伝』終

わりなき命』より）。

臥雲禪師の功績は、大きく3つが知られています。一つ目は、嘉永5（1852）年に行った、開祖である道元禪師の六百回大遠忌奉修。永平寺に10万人余りの参詣者があり大成功を収めました。二つ目は、嘉永7（1854）年に孝明天皇から下賜された、道元禪師の「仏性伝東」という国師号の実現。禪師は、実現にあたり、井伊直弼に面会し助力を働きかけたと伝わっています。三つ目は、明治新政府の誕生を好機に取り組んだ、宿願であった永平寺総本山制、宗規一新です。松平春嶽の知遇の厚い彦根清涼寺住職、鴻雪爪が禪師の片腕として動いたと言います。結局、能登の総持寺が反対し両本山制となりましたが、明治元（1868）年10月には、他の宗門よりもいち早く宗教政策についての公論の場（会議）が設けられ、高く評価されています。

永平寺と総持寺による争論は4年にわたり続き、この間、明治3（1870）年11月に臥雲禪師が81歳で逝去します。争論での形勢不利を恐れた是山は、喪を1年間隠し続けました。禪師が不在では立ち行かない、そんな状況だったのかもしれ

ません。

幕末明治期に永平寺の舵を取り、宗権確立のため奔走した臥雲禪師。その激動の長き道のりを貫いたもの、それは、大本山永平寺への一途な誠の心に違いありません。

関連史料・ゆかりの地

大本山永平寺



永平寺唐門

曹洞宗開祖・道元禪師が寛元2（1244）年に開いた坐禅の修行道場。境内には大小70棟余りの建物が並び、回廊で結ばれています。2015年からフランスの旅行ガイド本「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」にも掲載されています。

【住所】永平寺志比5-15（JR福井駅より京福バス「特急永平寺ライン」で約30分）

多くの優れた弟子を育てた 儀山善来



儀山善来肖像
(曹源寺蔵)

日 本という国が大きく揺れた明治という時代。この激動の時代の、日本の指針となるような思想の一滴が若狭から湧き出しました。大島畑村（現在の大飯郡おおい町大島）で生まれた儀山善来は師を求め諸国を行動し、岡山曹源寺の太元孜元のもとにたどり着きます。太元老師は一見して儀山の底知れぬ才能を見抜き、厳しく教育しました。その後、儀山は曹源寺で悟りを得て、太元老師の法を継ぎ、弟子の教化に尽くしたのです。

儀山が曹源寺での作務を終え、風

呂につかろうとしたときのことです。あまりの熱さで湯槽に入ることができずにいると、それに気が付いた一人の弟子が、手桶にある水を湯槽に注ぎました。弟子は、儀山老師が入るのにちょうどよい温度となつたことを確認し、手桶の残り水を無造作に地面に捨てました。それを儀山が見た瞬間、大きな一喝が曹源寺に響き渡ります。「馬鹿者。お前がいま無造作に捨てたその一滴の水を、なぜあと数歩進んで草木の根元にかけてやらなんだか。日照り続きで、その草木が泣いている声がお前には聞こえぬのか」と。この大

喝を受けて、その弟子はぼつと悟りを得ることができました。この弟子こそ、後の天龍寺管長として名を天下に知らしめた滴水宜牧です。その他にも、儀山は多くの優れた弟子を育てます。その中には、妙心寺の越溪守謙や円覚寺の今北洪川、釈宗演といった、時代を築いたそうそうたる人物がいます。儀山は、まさに若狭の一滴が大河となり世界に広がる、その根幹となった禅師だったのです。

明治10（1877）年、儀山に死の影が迫ると、危篤を聞きつけた越溪守謙と釈宗演は、急ぎ岡山へ向かいました。しかし、一歩及ばず、儀山は弟子の到着を待つことなく亡くなります。後に世界に「ZEN」を広めた釈宗演の自叙伝『衣の純び』は、このときをもつて絶筆しており、



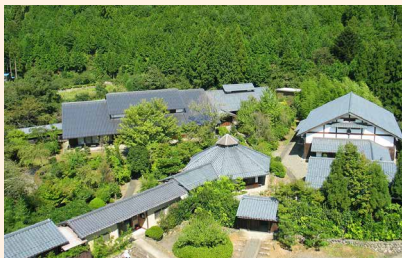
曹源寺

いかに儀山の死によるショックが大きかったか伺い知れます。

儀山は慶応2（1866）年にその多大なる功績をもつて天皇から仏国興盛禅師の称号を賜るなど、一時代を築いてきました。その活躍の一端は、昭和を代表する作家、水上勉が現代に伝えていきます。そして、水上が私費を投じて故郷おおい町に創設した若州一滴文庫の名前は、儀山禅師と滴水宜牧の「一滴の水」の逸話から名付けられたのです。

関連史料・ゆかりの地

若州一滴文庫



若州一滴文庫
(水谷内健次撮影)

若州一滴文庫は、郷土出身の作家である水上勉の2万冊を超える蔵書や、水上が集めた絵画などの美術作品を展示しています。舞台が竹林に面した劇場や植栽豊かな庭園で、水上文学の世界を堪能できます。

【住所】大飯郡おおい町岡田33-2-1
(JR若狭本郷駅から福鉄バスで「大飯中学校前」下車徒歩3分)

参考資料等

禅文化研究所『近世若州僧宝伝』臨濟宗相国寺派第四教区
水上勉『曹源一滴のこと』『一滴』若州一滴文庫

執筆・協力

若州一滴文庫 NPO 法人 一滴の里 事務局

三國港を救った オランダ人技師、 エッセル



G.A. エッセル肖像
(淀川資料館蔵)

三國（坂井市三國町）は、『日本書紀』や『続日本紀』にも登場する古い港町。江戸時代後期から明治時代にかけては、特に北前船の寄港地として知られます。福井県嶺北地方の河川が九頭竜川に集結し海へ注ぐ場所に位置するこの港は、越前の一大経済拠点だったのです。しかし、三國港は河口港ならではの課題を抱えていました。九頭竜川上流からの土砂がたまりやすかったのです。かつて商港として繁栄した港は、現在の三國漁港よりも1〜2キロ川上にありました。港の水深が浅くなつては大きな船が入れず、商

売ができません。地元の人々は、何とか港を改修して、賑わいを維持したいと政府に訴えました。

そこで招へいされたのが、オランダ人土木技師 G. A. エッセルです。エッセルは明治9（1876）年、三國を訪れ、港を調査。九頭竜川河口右岸に突堤を、対岸の新保には水中にT字型の水制を設け、川幅を狭めて水の勢いを増し、緩やかに湾曲した突堤で水の流れを導き、土砂とともに日本海へ流すという改修計画を立てます。この計画はデ・レイケに引き継がれ、明治11（1878）

年に着工。明治15（1882）年、三國港突堤は完成しました。日本の近代土木史上重要な遺構として、国の重要文化財に指定されています。



突堤工事の様子
(明治12(1879)年頃)

さて、オランダに帰国したエッセルは、後に自分の足跡を二十数冊の回想録にまとめています。その中の第二巻には、日本行きを希望したきっかけから帰国途中の船旅までの出来事が記されています。

日本を離れて三十年以上も後に書かれたこの一冊には、三國での思い出も多く綴られています。九頭竜川の左岸側に広がる松林と芳しい花々の咲き乱れる砂丘。東尋坊の海女たちが採ったサザエやナマコ、アワビなど。聖なる島 雄島では、革製品を身に着けて足を踏み入れることは許されず、藁製のサンダルにはきかえたこと。

約半年という短い滞在にも関わらず、エッセルが三國の風物について、これだけ多くのことを書き綴っていると、よほど印象深い

土地だったようです。

ちなみに、トリックアートで世界的に知られる版画家 M. C. エッシャーは、G. A. エッセル（エッシャー）の五男にあたります。そのゆかりから、過去に「みくにトリックアートコンペ」が開催されたこともありました。エッセル（エッシャー）は、父子揃って三國の地に大きな足跡を遺しています。

関連史料・ゆかりの地

三國港突堤



明治時代に造られた突堤は中央までの511メートルで、その先は昭和期に継がれました。右岸に広がる三國サンセットビーチは、排出された砂がたまってできた三國港突堤の副産物だといえます。

参考資料等

みくに龍翔館編『第21回みくに龍翔館特別展図録「明治三大築港展」』
龍翔館（三國町郷土資料館）編『蘭人工師エッセル 日本回想録』三國町

執筆・協力

みくに龍翔館 学芸員 釣部 由紀子

明治国家のプランナー、 渡辺洪基

外交、政治、教育で手腕を発揮

渡 辺洪基は、幕末の福井藩から東京府知事、次いで帝国大学（東京大学）初代総長に就任したことで知られる人物です。

洪基は、府中（現在の越前市）の町医、渡辺静庵の長男に生まれました。藩校、立教館で学んだ後、福井で医学や漢学を学び、江戸に出て佐倉の蘭学者佐藤舜海に師事します。その後、慶応元（1865）年から、福沢諭吉の塾（後の慶應義塾大学）で洋学を学びました。

諭吉との間でこんな逸話が残っています。諭吉の塾で正月、故郷に帰らない塾生が集まっていた時、雑煮を食べたいと誰かが言い出し、洪基が餅を調達することになりました。



渡辺洪基（個人蔵）

幕末の混乱期で、餅の入手も困難でしたが、洪基は「俺に策がある」と短刀を取り出し、部屋を出ていきました。皆が、強盗でもするのではと心配する中、洪基は笑いながら「先生の家の床の間の鏡餅の後ろを切り取ってきた。前部さえあれば足りる」と話したといひます。諭吉の妻が気づき、諭吉が塾生に問い質したところ、洪基の仕業であることが分かり、

諭吉は笑って諫めたそうです。

その後、洪基は、医を捨て、政治の道を歩むことを決意。「優れた医者は国の有様を診察し、その行く末を治していくものだ」とその気持ちで語ったといわれています。洪基は、英語ができたことが幸いして、明治3（1870）年に外務省に入り、翌年、岩倉遣外使節団に随行。帰国後、外務官僚としての歩みを進めました。

明治18（1885）年、洪基は東京府知事に就任します。就任直後に東京を襲った大洪水に対し、直ちに被災地へ赴き、流失・破損した橋の架橋・修理を早急に進めるなど復興に力を注ぎました。現地を自分の目で確認し、対策を講じるやり方は、被災地住民に大きな安心を与えたといいまひます。

また、東京にも外国の都市のようなマークが必要だと提案。明治22（1889）年に洪基（当時、東京市参事会員）が提案し決定されたマークは、今も東京都の紋章となっています。



東京都紋章

明治19（1886）年には、帝国

大学の初代総長に就任。伊藤博文首相など政府首脳は、初代総長は空理空論を唱える学者ではなく、行政手腕と実行力を備えた者がふさわしいと考え、洪基を推したといわれています。洪基は、就任後、貧しい学生への学費支援を企業等に要請。就職を約束しての学費貸与という提案に、企業等から卒業生の数を超える申込みがあったといひまひます。

その後、洪基は、貴族院議員などを歴任。多彩な分野で能力を発揮し、日本を世界水準に押し上げたその歩みは、『明治国家のプランナー』と評されています。

関連史料・ゆかりの地

武生公会堂記念館



昭和4（1929）年に武生公会堂として建設されました（国の登録有形文化財）。1階では常設展で越前市の歴史を紹介。2階では、特別展を開催しています。

【住所】越前市蓬菜町 8-8（JR 武生駅から徒歩5分）

自由民権運動に

影響を与えた

吉田健三



吉田健三肖像
〔山本条太郎
伝記〕より〕

明治5（1872）年には、健三は自由民権運動を擁護する東京日日新聞（現在の毎日新聞）の創刊に出資。新聞を通じて、板垣退助、後藤象二郎、竹内綱などと交友関係が生まれ、板垣の自由民権運動に資金援助しました。伊藤痴遊（元代議士）は、「健三氏は、金を出したり、その陰ながらの努力は大したものだ」と述べています。その後、様々な事業で成功し、横浜で有数の富豪となった健三ですが、明治22（1889）年、40歳の若さで亡くなります。当時11歳だった吉田茂に遺された財産は50万円（現在の金額で数十億円）にも上りました。

幕

末に貿易港として開港され、開国日本の象徴であった横浜。明治初期の横浜で大富豪になり、後の総理大臣吉田茂の養父としても知られる人物が吉田健三です。

健三は、嘉永2（1849）年、福井藩士渡辺謙七（後に吉田姓）の



吉田茂肖像（国立国会図書館蔵）

長男に生まれました。16歳の時に脱藩し、大坂で医学、長崎で英学を学んだ後、英国軍艦で密航、2年間留学します。明治元（1868）年に帰国後、「英一番館」ことジャーディン・マセソン商会の番頭になり、商才を発揮。海外で身に付けた英語を駆使し、生糸や軍艦の売込みに成功しました。退職の際には、1万円（現在のお金で約1億円）のボーナスまで贈られたということです。健三は独立後、その資金を元手に醬油醸造をはじめ各方面の事業に手を伸ばしていきました。

健三の成功の背景を紐解くと、横浜での同郷人（福井県人）とのつながりが見えてきます。『山本条太郎伝記』では、健三は、丘陵を拓いて宅地となし、学校を新設し、社寺を創建するなど横浜開発に少なからず貢献した。：巨万の富を作ったが、資金の融通は同県人で横浜での成功者、上郎幸八（現在の越前市出身の実業家）氏に仰いだ。とか、三秀舎（印刷業）の創立者島連太郎（現在の越前市出身）は、明治17（1884）年頃、健三氏のもとに寄寓し、その紹介で佐久間貞一氏を頼って秀英舎（現在の大本印刷）



横浜市開港記念会館
（石川屋跡）

横浜開港50周年を記念し、市民の寄付金により大正6（1917）年に創建された横浜市開港記念会館。幕末、その敷地では、福井藩のアンテナショップで生糸貿易商だった「石川屋」が商いを行っていました。ここから福井藩の特産品が輸出されていたのです。

〔住所〕横浜市中区本町1-6（JR京浜東北線・根岸線「関内駅」南口から徒歩10分）

関連史料・ゆかりの地

に入った。など県人を助けたり、助けられたりする様子が出てきます。このほか、福井藩士で、後に日本美術界に大きな足跡を残す岡倉天心の父親、岡倉覚右衛門が、生糸商「石川屋」を横浜で営んでいます。

このように、移り住んだ福井人の横浜ネットワークが健三に大きなチャンスを与えた可能性がります。福井を出た健三ですが、福井の仲間の力で大きな富を築き、自由民権運動に大きな影響を与えていったのです。

参考資料等 長谷川郁夫『吉田健一』新潮社、山本条太郎翁伝記編集会編『山本条太郎伝記』

「食医」と呼ばれた

食育の祖、 石塚左玄



石塚左玄肖像
(NPO 法人フードヘルス石塚左玄塾蔵)

現在では一般的に使われている「食育」という言葉。この言葉のルーツは、福井にあります。文明開化の真っ只中の時代に日本で初めて「食育」なる言葉を使い、食育と食の重要性を提唱し「食育の祖」といわれているのが石塚左玄です。

左玄は、嘉永4（1851）年、福井市子安町（現在の福井市宝永4丁目付近）に町医師である石塚泰輔の長男として生まれました。成長した左玄は、慶応3（1867）年に福井藩の医学所で学びます。その後、福井藩医学校での勤務や藩の泉病院

で診察方と調合方として働き、上京しての外国人教師の助手を経て、明治6（1873）年に医師と薬剤師の資格を取得します。
明治7（1874）年、23歳の時、左玄は陸軍に軍医試補として採用されます。写真は、明治10（1877）年に西南戦争に従軍する直前に東京の写真館で撮影されたものといわれています。26歳の若いその顔は現代にも通じるハンサムな青年です。明治28（1895）年には日清戦争にも従軍しています。

その後、明治29（1896）年に

東京の市ヶ谷に「石塚食療所」という診療所を開設。望診法という独自の診察を行い、患者に食指導による治療を行いました。医師の処方箋には通常、薬の名前が書かれますが、左玄の処方箋には食事の内容や方法が書かれていました。それ故に、患者は左玄を食の医師、すなわち「食医」と呼び、毎日多くの患者が詰めかけたといわれています。

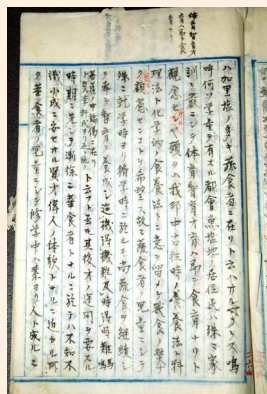
実は、「食医」と呼ばれる程に左玄が食を大事にしたのは、自身の持病があったからです。左玄は幼い頃から、へブラ病という大人になっても治らない、頑固なかゆみを伴う皮膚病を患っていました。また、腎臓も患うなど、軍医でありながら時には患者でもあり、入退院を繰り返していました。こうした自身のつらい経験があったからこそ、食の力・食の美・食の誠を追及し続け、食が心と身体の健康を左右していること、正しい食生活の重要性を国民に知らせることに人生を捧げたのではないのでしょうか。もし、左玄が健康体であれば、食育の祖にはならなかったかもしれません。

左玄は、明治42（1909）年に、尿毒症により58歳で亡くなりました。食を重んじた左玄にしては、あまりに短命なのではと思われるかも

しませんが、明治42年の男性の平均寿命が42歳であったことや、当時の最高レベルの食事をしていただけに思われる徳川幕府歴代将軍15人の平均寿命が51歳であったことなども含めて考えると、あながち短命とはいえないのではないのでしょうか。

関連史料・ゆかりの地

「食育」という言葉を初めて著した
「化学的食養生論」



(NPO 法人フードヘルス石塚左玄塾蔵)

いしづかさげん
石塚左玄は、「石塚食療所」の開設と同年の明治29（1896）年に、「化学的食養生論」を書き著しました。この中で、「食育」は子どもの教育の中で一番大事で、全ての教育の基本であり家庭で親が行うものだと著しており、日本で初めて「食育」という言葉を使いました。

近代法学の草創期を

駆け抜けた

矢代操



矢代操肖像
(明治大学史資料センター蔵)

は優秀な成績で司法省法学校を卒業し、フランスへ留学。異国の地で勉強に励みました。

学校卒業後の操は法律専門学校の講法学会の設立に奔走します。岸本・宮城が帰国すると、3人は共に法教育の理想像を追い求め、明治14(1881)年、ついに東京府数寄屋橋内旧三楽舎(旧島原藩邸)を借り受けて明治法律学校(現在の明治大学)を創立しました。創立に関し、当時の『東京日日新聞』は「無事開校されたのは、矢代操が一人一人あちこちを走り回り、世話したからだ」と報じています。

また、彼らは教育と学校経営に携わりながら官僚としても活動しており、操は元老院書記官を経て貴族院議事課長を務め、岸本は太政官御用掛・東京大学法学部講師・法制局参事官・司法省参事官などを経て大審院判事となり、宮城は大審院検事・司法省参事官を務めた後、政界に進出しています。

明治法律学校が開校した年は、自由民権運動の高まりに呼応して国会開設の詔勅が発せられた年でもあります。学生数が年々増える中、司法官僚でもあった操は明治23(1890)年の帝国議会開会に向けて心身を消耗し、病床に臥して

明 治大学駿河台校舎に立つ三人の創立者の銅像。その一人は、鯖江市出身の矢代操です。

嘉永5(1852)年、鯖江藩士松本家の三男として生まれた操は、文久元(1861)年頃に藩校進徳館に入学します。進徳館は文化11(1814)年創立の稽古所を前身とする藩校で、間部詮勝が改称し、儒臣芥川氏が教授を務めました。翌年、詮勝は江戸藩邸の稽古所も惜陰堂と改め、芥川氏の学問の流れを汲む大郷氏が教授となっています。

慶応元(1865)年、操は藩校

関連史料・ゆかりの地

鯖江藩の城下町



鯖江藩の武家屋敷跡地
(鯖江市指定文化財 植田家長家門)



「明治大学創立者・矢代操先生旧宅」看板

現在、屋形町の一角に「明治大学創立者・矢代操先生旧宅」を示す看板があります。今では藩政時代の面影を残す建物は少なくなりましたが、入り組んだ周辺の道々から、かつて鯖江藩政の中核であった陣屋の痕跡を見出すことができます。

【住所】鯖江市深江町・屋形町・本町・旭町周辺(福井鉄道西鯖江駅周辺)



「間部家文書」矢代操の足跡
(鯖江市まなべの館蔵)

しまいます。彼は生徒たちの未来に想いを馳せながら、39歳の若さで旅立っていったのです。

参考資料等

明治大学史資料センター編『私学の誕生—明治大学の三人の創立者—』創英社・三省堂書店、松井政治編『新撰鯖江誌』新撰鯖江誌復刻刊行会、鯖江市史編纂委員会『鯖江市史』史料編別巻地誌類編 鯖江市

執筆・協力

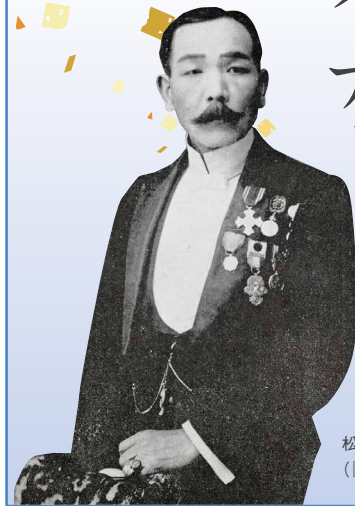
鯖江市教育委員会文化課

世界の

エンターテイナー、

松旭齋天一

しょうきょくさいてんいち



松旭齋天一肖像
（『福井県の華』より）

じています。当時、東京では劇場での奇術興行が認められていませんでした。奇術は歌舞伎やその他の芸と比べて低く見られていたのです。一流の劇場で興行したいと念願していた天一は、劇場であった「文楽座」を「文楽亭」と一字変えて寄席として警察から許可を得たのです。この興行は空前の大ヒットを記録。東京の大劇場で奇術を演ずるという天一の先見性がスターの座を射止めたのです。

天一の人気は欧米にも広がります。明治34（1901）年から実施したアメリカなどにおける海外巡業を大成功に収めます。帰国後、明治

38（1905）年に東京・歌舞伎座で興行を行い話題になります。外国で学んだ新奇術により再び日本で大人気になったのです。天一がこれほどまで人気を博した秘密の一つは、ダイナミックな劇場型のマジックを



明治43（1910）年、(東京市)新富座公演でのポスター
（河合勝マジックコレクションより）

生み出したことです。明治期の奇術師は落語家組織に所属しており、手品は寄席で演じられる程度でしたが、天一は、独自の演出を加えた水芸や大掛かりで斬新な舞台奇術を作り上げ、エンターテインメントに高めたのです。

こうした数々の功績により今や松旭齋天一は「日本近代奇術の祖」と称されています。現代のマジシャンにつながる多数の弟子を輩出し、天一の「天」の字は現在のイリュージョニストのルーツにもなっています。

関連史料・ゆかりの地

松旭齋天一のふるさと福井への贈り物

天一が寄進した藤島神社境内の石灯籠



天一は名声を得てからも何度か福井で凱旋公演を行っています。故郷を思う天一は度々貧しい人に金品を贈ったり、神社やお寺に寄付していました。藤島神社境内にある石灯籠も天一が寄進したものです。

【住所】
福井市毛矢3-8-21
（JR福井駅より京福バス赤十字病院行き「不動山口」下車徒歩5分）

明治時代に世界を舞台に活躍したマジシャン松旭齋天一。天一は、嘉永6（1853）年、福井藩士の家来の子として福井城下に生まれ、一家で四国に渡り寺で育ちました。幼いころから人を驚かすことが大好きで、悪戯を繰り返して、15歳の時に寺を追い出され旅芸人になります。

天一は、生まれつきの才能を活かします。剣渡り、落語、手品などの芸を見よう見まねで披露していましたが、和歌山の興行で大きな失敗をします。興行主のせられて一度も挑戦したことのない「火渡り」に即

興で挑むことになり、あまりの熱さに途中で気絶し、全治3か月の火傷を負うことになったのです。これがきっかけとなり、天一は秘法や手品のタネを研究し、完全に自分のものとしてから芸を披露するようになりました。

天一は一座を結成して、明治13（1880）年、28歳の時に大阪で旗揚げ興行をし、明治21（1888）年、35歳の時に満を持して東京の大劇場で興行を始めます。実は、このスターとなる第一歩となった東京の興行前に、天一は「一大奇術」を演

日本鉱物学の父にして 古書籍蒐集に尽力した 和田維四郎



和田維四郎肖像
(国立国会図書館蔵)

明 治期に設立され日本の産業を支えた官営八幡製鉄所の長官を務め、日本鉱物学の父とも呼ばれるのが小浜出身の和田維四郎です。維四郎は、安政3（1856）年に小浜藩士和田耕甫の次男として生まれ、明治3（1870）年に貢進生として開成学校（後の東京大学）でドイツ人カール・シエンクに学び、近代鉱物学の基礎を修得しました。

維四郎は、明治11（1878）年に『本邦金石略誌』を出版するなど、鉱物学の研究成果を発表するとともに、学生のための教科書も手掛けました。ドイツ留学後は、東京大学教授を務めるとともに、農商務省地質局長として鉱石調査や地質調査などを進め、日本の産業発展に大きく貢献しました。その後、八幡製鉄所の2代目長官として原材料と燃料の安定確保に務め、自ら中国へ渡り鉄鉱石を輸入するなどしました。明治35（1902）年、製鉄所長官を退官した後も、鉱業発展に力を尽くし、当時、大きな問題であった鉱山の煙毒問題にも取り組んでいます。

明治37（1904）年には自身の研究の集大成として『日本鉱物誌』を著し、国産鉱物130種類を紹介して近代鉱物学の基礎を確立すると同時に、英訳した『MINERALS OF JAPAN』を出版して日本の鉱物学を世界へ広く紹介しました。なお、蒐集した約4千点に及ぶ国産鉱物は、「和田コレクション」として現在も残されています。

また、維四郎は、古書籍類の蒐集と書誌学の研究者としても大きな功績を残しています。当時、洋学が盛んになる中で、維四郎は古書籍の散逸を危惧し、岩崎久弥（岩崎弥太郎の子）や久原房之介などの援助を受けて古書籍を蒐集しました。この膨大な古書籍約4万5千点余は、現在、東京の東洋文庫などに収められています。また、江戸時代初期に本阿弥光悦らが出版した「嵯峨本」に関する書誌学的な研究をまとめ、光悦の意匠による雲母摺、色変り用紙を再現した『嵯峨本考』を出版するなど、江戸時代初期の出版文化・書誌学研究の発展にも寄与しています。

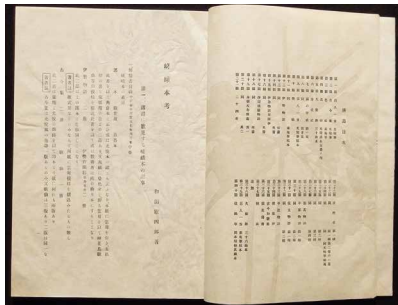


**公益財団法人
東洋文庫**

関連史料・ゆかりの地

和田維四郎が蒐集した古書籍が保管されています。事前に申請すると維四郎が蒐集した書籍を閲覧することができます。また、ミュージアムも併設されています。

【住所】東京都文京区本駒込 2-28-21 (JR・東京メトロ駒込駅から徒歩 8 分)



日本の歴史資料の価値を紹介した『嵯峨本考』
(小浜市教育委員会蔵 酒井家文庫)

われています。生涯を通じて多彩な才能を発揮し日本を代表する研究者となった維四郎。その研究心の根幹には故郷を思う心があったのかもしれない。

参考資料 和田維四郎『嵯峨本考』、福井県文化誌刊行会編『我等の郷土と人物』第3巻 小浜市立図書館編『和田維四郎』

執筆・協力 小浜市教育委員会文化課

一途な思いで

敦賀発展に取り組んだ

大和田莊七



大和田莊七肖像
(『敦賀市史』より)

日 本海の重要な港であり、北陸道の要衝でもあった敦賀。その近代化の基盤を築いたといえるのが大和田莊七です。

莊七は、安政4（1857）年、敦賀市相生町の葉屋、山本九郎左衛門の次男として生まれました。子どもの頃から賢く、それが北前船の船荷問屋、初代大和田莊七の目にとまり、22歳で大和田家の養子となりました。明治20（1887）年、31歳で襲名すると、近代化が進む時代の波をいち早く察知し、手腕を發揮。日本海沿岸一の大実業家へと成長して

いくのです。

明治17（1884）年、敦賀・長浜間の鉄道が開通。莊七（当時36歳）は、敦賀の商人に対する便宜と利益のため、明治25（1892）年に大和田銀行を設立します。莊七は、設立の前年、総理大臣兼大蔵大臣であった松方正義と懇談し、敦賀に米穀取引所と銀行を設立する必要性を力説。その際、莊七自身による銀行設立を薦められたのが契機といわれています。莊七は、設立に当たり、在来の銀行を士族銀行とすれば、大和田銀行は呉服屋形式で親切丁寧、客に敬意を表す」と語っており、その

とおり、**丁稚銀行**のあだ名で繁盛しました。

鉄道の開通を機に活況を見た敦賀。しかし、莊七は、鉄道輸送の発展による港の存在意義の低下を懸念します。莊七は、海外に活路を求め、敦賀港が国際的な貿易港として指定されるよう働きかけを開始します。日清戦争の最中に調査員をウラジオストクに派遣。収集した情報を関係者に提供し、指定に備えるよう指導したといえます。明治32（1899）年、その努力が実り、敦賀港は国際貿易港の指定を受けます。しかし、その直後、鉄道の富山延伸により国内航路が不振に陥ります。さらに外国貿易も伸び悩み、国の指定解除の危機に直面。莊七は、自ら貿易会社を設立して牛や大豆を輸入するなど指定維持に尽力しました。

明治45（1912）年、新橋と金ヶ崎（敦賀）間に**欧亚国際連絡列車**が運行。敦賀は、ウラジオストクからシベリア鉄道を通じてパリまで直結する玄関口となり、莊七の努力は敦賀の発展に結実したのです。

莊七が壮年のころ友人に宛てた手紙には、**幸運者は真の不運者を助くべく、社会に貢献するのが人の道**と記載されています。郷土を中心に

その想いを一生を通して貫いた、まさに、愛郷に誠を尽くした「敦賀近代化の父」だったのです。



明治42（1909）年の敦賀港
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

関連史料・ゆかりの地

重要文化財 旧大和田銀行本店本館

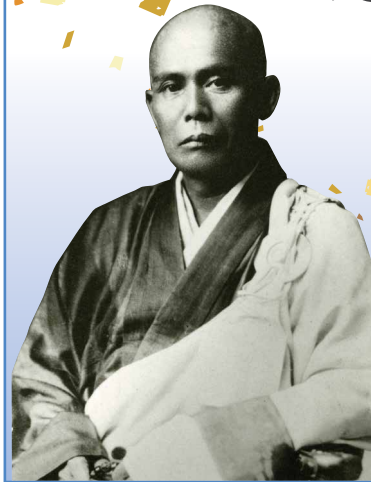


現在、敦賀市立博物館として利用されている旧大和田銀行の本店建物。地上3階、地下1階の洋風建築で、屋内には大理石も用いられています。当時、北陸では珍しかったエレベーターが設置され、3階の集会場等は市民に開放されていました。

【住所】敦賀市相生町7-8（JR敦賀駅よりぐらっと敦賀周遊バス「博物館通り」下車すぐ）

なつめ そうせき
夏目漱石らにも

しやくそうえん
影響を与えた
釈宗演



釈宗演肖像
(個人蔵)

日 仏友好160年を記念して、フランスのパリで行われた「ジャポニスム2018」。その中には、「禅文化週間」と称し、禅に関する書画・庭園・茶道などを取り上げた展示が行われるとともに、臨済宗円覚寺派横田南嶺管長による「ZEN」の講演会が実施されました。この「ZEN」を世界に広めたのが、高浜町出身の釈宗演禅師です。

宗演は幼名を常次郎つねしろうといい、病弱な子どもでしたが、5〜6歳頃から次第に身体も丈夫になっていきました。10歳になった時、親戚にあたる

越溪守謙えつげいしゆけん老師が実母の92歳の祝賀で高浜に帰郷され、その際、宗演は出家しました。

宗演の幼少期の腕白な様子を伝えるエピソードがあります。建仁寺(京都府京都市)の千葉俊崖ちのばしゆんがい老師のもとでの修行中、夏の盛りの暑い時期のことです。老師は知恩院ちおんいん大方丈おほむかむに出かけていました。鬼のいぬまに何とやらで、宗演は廊下で手足を大字に広げ昼寝をします。ところが、思ったより早く老師が帰ってききました。老師が自室に行くには宗演が昼寝をしている廊下を通るしかありません。宗演は起きるに起きられず寝

たふりをしたのです。そんな弟子の姿に怒るでもなく、宗演の足元から「ご免なされ」と言い、居間に入っていました。その時の宗演の心の内は、きつと生きた心地がしなかったのではないのでしょうか。

宗演は26歳という異例の若さで修業を終えますが、その後、多くの著名な人物と交流しています。明治18(1885)年、慶應義塾に入学すると、福沢諭吉ふくざわゆきちに師事して西洋の学問を学びます。その後、「幕末の三舟さんぶね」の一人、山岡鉄舟やまおかてつしゆに出会い、「和尚の目は鋭すぎる。もつと馬鹿にならねばいかん。印度いんどへでも行って来るがいい」と助言を受けます。諭吉と鉄舟の支援の下、宗演はセイロン(現在のスリランカ)に向かい、修行の日々を過ごしました。

また、宗演は、明治の文豪、夏目漱石そうせきとも深い関わりがあります。明治27(1894)年12月、漱石は円覚寺の宗演の下で2週間参禅。この時の体験をもとにしたのが小説『門』であり、小説中の老師とは宗演のことを指しています。大正2(1913)年にも東慶寺で面会しており、この時のことは随筆『初秋の一日』に記されています。また、漱石の葬儀の際には、漱石の遺言により、宗演が導師を務めました。

多くの著名な人物と交流し影響を与えた釈宗演。2018年には没後100年を記念し式典が開催されるなど、彼の教えは今を生きる人々にも伝えられています。



釈宗演顕彰碑 (高浜公民館横)

関連史料・ゆかりの地

釈宗演生誕の地



釈宗演没後100年を記念して町内外の有志の寄付により整備されました。元よりあった生誕地の碑のほかに新たに略歴碑が設置されました。

【住所】大飯郡高浜町若宮2-47 (JR若狹高浜駅より徒歩約10分)

参考資料等

井上禅定『釈宗演伝』禅文化研究所
高浜町郷土資料館編『平成15年度企画展図録「釈宗演」』

執筆・協力

高浜町郷土資料館 主査 寺下千代美

横浜生まれの

福井藩士、

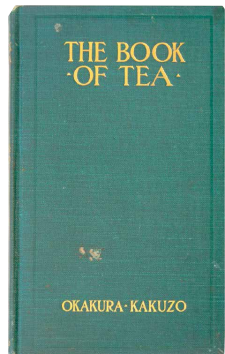
岡倉天心



岡倉天心肖像
(茨城県天心記念五浦美術館蔵)

近代日本を代表する美術指導者、思想家であり、英文著作『茶の本』や「アジアはひとつ」という言葉で知られる国際的な文化人でもあった岡倉天心。

天心（本名は覚三）は、文久2（1862）年、開港間もない横浜



茶の本
(福井県立美術館蔵)
東洋の美と芸術の精神を紹介した。

で福井藩の物産を扱う貿易商、岡倉覚右衛門の次男として生まれましたが、福井の港町、三国出身の母このや乳母つね（橋本左内の縁戚にあたる）、店の使用人など福井人に囲まれた環境で育ちました。

元々、岡倉家は福井藩の下級武士の家柄でした。養子であった天心の父、覚右衛門はその才覚を見込まれ、藩の横浜貿易の拠点「石川屋」を任されるまでになります。下士身分から町人身分へと転じますが、生糸などを外国に売って藩財政を潤し、珍しい舶来物を輸入して藩士たちに喜ばれたほか、国内外の重要情報を収

集して江戸藩邸に報告する探索方のような仕事も行っていました。

天心の弟、岡倉由三郎の回想によれば、覚右衛門は子どもの教育には厳格で、コマ廻しなどは絶対にさせず、天心が物心ついた頃には読み書きのほかに、居留地の外国人教師から英語を、また、長延寺（神奈川県横浜市）の住職から漢学を学ばせ、洋の東西に偏らない英才教育を施したとのこと。

10代半ばで英語の意味疎通に不自由しなかったバイリンガルの天心は、東京大学在学中に御雇い外国人教師の米国人アーネスト・フェノロサの通訳として、その美術研究を助け、以後、日本美術に深く関わっていきます。明治期の欧米文化崇拜の風潮のなか、衰退していた伝統美術に新たな息吹きをもたらす、日本美術の救世主となっていくたのです。

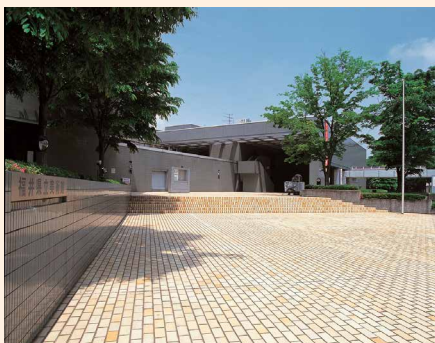
福井市美山地区では、幼い天心が父覚右衛門に連れられ、父の生家を度々訪れたと伝わっています。天心は、「郷里福井」と手紙に書くなど、父親の故郷を自身のふるさととしていました。また、自筆の履歴書には「平民」と記しながらも「旧福井藩士」と併記し、福井藩の武士につらなる出自に誇りを持っています。

した。

天心が産声を上げ、その類いまれなる才能のゆりかごともなった横浜の貿易商館「石川屋」は、横井小楠による構想を由利公正が具現化した殖産興業策の一環として開かれたものです。横浜生まれの福井の先人、岡倉天心は、まさに幕末明治の福井の歴史の中で誕生し、福井人として活躍したといえるのです。

関連史料・ゆかりの地

福井県立美術館



岡倉天心は東京藝術大学創立の中心に立ち、校長も務めながら、横山大観、菱田春草などの日本画家を育てました。福井県立美術館では、所蔵品展や特別展で適宜天心ゆかりの作品も公開しています。

【住所】福井市文京3丁目16-1
(JR 福井駅からコミュニティバスまで
田原・文京方面線「県立美術館前」下車すぐ)

佐久間勉艇長 妻の死を悲しむ もう一冊の手帳



佐久間夫婦肖像
(若狭町教育委員会提供)

明治43(1910)年、山口県新湊沖で起こった潜水艇の事故により、13名の艇員とともに殉難した佐久間勉艇長。彼が死の間際、手帳に記した遺書「佐久間艇長遺言」には、艇長の最後まで責任を果たそうとする姿勢や部下の遺族のことを真剣に心配する人間性が現れています。この遺書は全世界に感動を与え、夏目漱石が名文と絶賛し、与謝野晶子が追悼の歌を詠んだことでも知られています。

実には、艇長の家族を思う気持ちなど、その人柄や行動をうかがい知る事ができる手帳がもう一冊あります。「明治四三年懐中日記」といわれるその日記は、艇長の孫、佐久間宏氏が、平成24年夏に生家で見つけたもので、明治40(1907)年から43(1910)年の事が記されています。この懐中日記は艇長の備忘録として書かれ、日記には「出」(手紙を出した人の名前)、「受」(手紙を受けた人の名前)や日々の出来事、時には欄外に体重などが書かれています。

「二月十一日 紀元節 晴、早天、遥拜式ヲ行フ、終テ「ボートレース」嗚呼此二日ハ我レニ於テハ、何タル凶日ナリシゾヤ夜九時三十分當ニ□□ニ就カントスル時「今朝女生レ次子死ス」ノ凶電ニ接ス、実ニ万事夢ノ如シ、アア」

「二月十二日 降雪、晴、寒気強シ、午前四時情深キ艇員ニ送ラレツツ呉停車場ヨリ乗車、急ギテ富山ニ向ケ帰途ニツク・・・」

「二月十三日 降雪、午前十時過ぎ富山停車場ニ着ス、・・・急ギテ宅ニ入り長ヘテ眠テ覚メザル次子ノ死顔ニ接シ感慨無量、嗚呼何等ノ悲痛事ゾヤ」

「二月十四日 晴、富山 次子ノ葬式施行、午后二時出棺 市離レノ市役火葬場ニ於テ火葬ニ付ス、可憐二十一才ヲ一期トシテ一朝ノ煙ト消エヌ、嗚呼悲イカナ」



懐中日記(写真中央)

艇長の妻、次子は長女、輝子を出産しましたが、「女の子さんですよ。」との声を聞くと、その後間もなく息を引き取り帰らぬ人となりました。恩師である成田鋼太郎先生への手紙の中でも「隻手、否双手を切断せられたる感あり」と妻の死を伝えています。

明治39(1906)年9月に敬慕してやまなかつた母が亡くなり、更に新婚生活一年余りの最愛の妻を亡くすという悲運に見舞われた佐久間艇長。この日記からは、勉の妻への愛と、嘆き悲しみの深さを知らされます。

関連史料・ゆかりの地

佐久間艇長 遺徳顕彰式典



佐久間艇長の出身地である若狭町北前川では、毎年第六潜水艇遭難の日である4月15日に、艇長の墓前、「沈着勇断」の記念碑前広場において、佐久間艇長遺徳顕彰式典が行われています。広場の近くにある佐久間記念交流会館では、佐久間勉にゆかりのある品々を多数展示しています。

参考資料等
佐久間勉「明治四三年懐中日記」
佐久間勉「佐久間艇長遺言」

執筆・協力
若狭町教育委員会事務局 佐久間記念交流会館

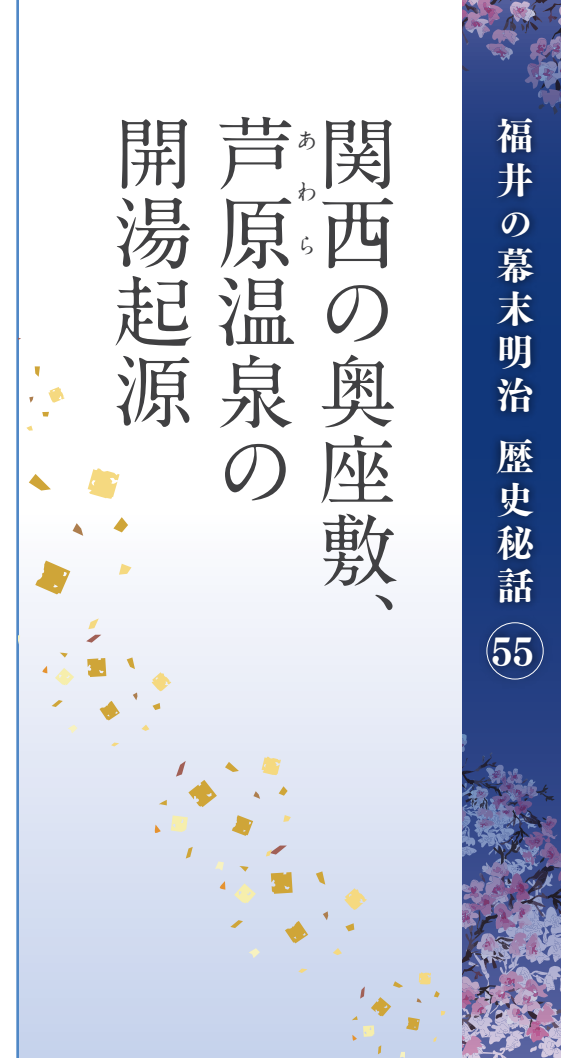
関西の奥座敷、 芦原温泉の開湯起源

福 井北部の温泉街で、関西の奥座敷と呼ばれる芦原温泉。明治16（1883）年9月9日に堀江十楽の字一番に井戸を掘ったところ、湯が湧き出たとされるのが最初です。これは『福井県芦原温泉誌』（島崎圭一著）に記載されているもので、その後の各温泉誌にも引用され、ほぼ定説のようになっていきます。

ただ、これは、公的な記録が残っておらず、開湯から50年たった頃の聞き取りによって記載されたものです。そのため、いくつかの疑問点があります。例えば、同誌には湯が出て大評判になったとありますが、同時期前後の新聞にはほとんどその記載がありません。更に、他の地区が温泉を掘り出したのは翌年3月以降

と期間が空いているのはなぜでしょうか。

開湯期から旅館をしていた（現在は廃業）お宅に伝承があります。「あの井戸は、元々飲料水を確保するために掘っていたので、出てきたのがお湯、しかも塩分が含まれていたので大変がっかりし、しばらく放置していた」というものです。50年誌とは真逆の話です。その続きは「寒くなつてからお湯が出たことを思い出し、風呂に使ってみたところ大変よく評判になった」という話で、ここは50年誌と似ています。温泉開湯に「がっかり」では後々の評判に都合が悪いので、最初の部分は削除されたのでしょうか。



明治時代末の芦原温泉全景

ここに注目の資料が二つあります。一つ目は梅浦村（現在の丹生郡越前町梅浦）外四ヶ村戸長だった岡田彦三郎が明治18（1885）年8月26日から12日間にわたり芦原温泉へ湯治に出かけた記録です。これの8月27日に、明治17（1884）年3月に早損の備えに井戸を掘ったところ温泉が湧出したと記されています。二つ目は明治17年3月13日の福井新聞。ここには、近頃に温泉が湧出したとの記事があります。

この二つの資料からすると、当時の人々が明治17年3月に温泉が湧出したことを認識しているのがわかります。

す。ではなぜ50年誌では明治16年9月9日としたのでしょうか。まず井戸そのものを掘ったのは明治16年であることが明治17年4月3日の福井新聞の記事よりわかります。そして岡田彦三郎日記にあるように、「水」を求めて掘った井戸から「塩味のするぬるい湯」が出たので放置され、翌年になってから温泉として認識されたのかもしれませんが。推測の域を出ませんが、伝承と記録を合わせると定説とは違った開湯の風景が見えてきそうです。

関連史料・ゆかりの地

温泉発祥地公園



温泉発祥の井戸

芦原温泉で最初に温泉が掘り当てられたのは堀江十楽の地籍で、現在は温泉発祥地公園となっています。温泉発祥の井戸や石碑があり、往時の名残を感じさせてくれます。

【住所】あわら市堀江十楽1-30-1（えちぜん鉄道あわら湯のまち駅より徒歩6分）

福井県内歴史系博物館等一覧

※入館料および休館日等については各施設までお問い合わせください。

福井県立歴史博物館	福井市大宮2-19-15	0776-22-4675
福井県立美術館	福井市文京3-16-1	0776-25-0452
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	福井市安波賀町4-10	0776-41-2301
福井県立こども歴史文化館	福井市城東1-18-21	0776-21-1500
福井県立図書館	福井市下馬町51-11	0776-33-8860
福井県文書館	福井市下馬町51-11	0776-33-8890
福井県ふるさと文学館	福井市下馬町51-11	0776-33-8866
福井市立郷土歴史博物館	福井市宝永3-12-1	0776-21-0489
福井市グリフィス記念館	福井市中央3-5-4	0776-50-2911
福井市橘曙覧記念文学館	福井市足羽1-6-34	0776-35-1110
福井市愛宕坂茶道美術館	福井市足羽1-8-5	0776-33-3933
大野市歴史博物館	大野市天神町2-4	0779-65-5520
はたや記念館 ゆめおーれ勝山	勝山市昭和町1-7-40	0779-87-1200
勝山城博物館	勝山市平泉寺町平泉寺85-26-1	0779-88-6200
白山平泉寺歴史探遊館まほろば	勝山市平泉寺町平泉寺66-2-12	0779-87-6001
あわら市郷土歴史資料館	あわら市春宮2-14-1	0776-73-5158
藤野巖九郎記念館	あわら市温泉1-203	0776-77-1030
吉崎御坊蓮如上人記念館	あわら市吉崎1-901	0776-75-2200
みくに龍翔館	坂井市三国町緑ヶ丘4-2-1	0776-82-5666
瀧谷寺宝物殿	坂井市三国町滝谷1-7-15	0776-82-0216
坂井市丸岡歴史民俗資料館	坂井市丸岡町霞町4-12	0776-67-0001
福井県教育博物館	坂井市春江町江留上緑8-1	0776-58-2250
鯖江市まなべの館	鯖江市長泉寺町1-9-20	0778-51-5999
越前市武生公会堂記念館	越前市蓬萊町8-8	0778-21-3900
越前和紙の里 紙の文化博物館	越前市新在家町11-12	0778-42-0016
越前町織田文化歴史館	丹生郡越前町織田153-1-8	0778-36-2288
越前古窯博物館	丹生郡越前町小曾原 107-1-169	0778-32-3262
福井県陶芸館	丹生郡越前町小曾原120-61	0778-32-2174
北前船主の館 右近家	南条郡南越前町河野2-15	0778-48-2196
敦賀郷土博物館	敦賀市三島町1 (八幡神社内)	0770-22-1193
敦賀市立博物館	敦賀市相生町7-8	0770-25-7033
美浜町歴史文化館	三方郡美浜町河原市8-8	0770-32-0027
若狭国吉城歴史資料館	三方郡美浜町佐柿25-2	0770-32-0050
福井県立若狭歴史博物館	小浜市遠敷2-104	0770-56-0525
福井県立若狭図書学習センター	小浜市南川町6-11	0770-52-2705
福井県年縞博物館	三方上中郡若狭町鳥浜122-12-1	0770-45-0456
佐久間記念交流会館	三方上中郡若狭町北前川61-2	0770-45-1780
若狭鯖街道熊川宿資料館「宿場館」	三方上中郡若狭町熊川30-4-2	0770-62-0330
若狭町歴史文化館	三方上中郡若狭町市場20-17	0770-62-2711
若州一滴文庫	大飯郡おおい町岡田33-2-1	0770-77-2445
おおい町立郷土史料館	大飯郡おおい町成和2-1-1	0770-77-2820
おおい町暦会館	大飯郡おおい町名田庄納田終111-7	0770-67-2876
高浜町郷土資料館	大飯郡高浜町南団地1-14-1	0770-72-5270

福井の幕末明治をひも解く

福井の幕末明治

歴史秘話